



Am Dienstage nach Bartholomäi, des Jahrs als Kaiser Wenzel mit der schönen Bademagd der Prager Haft entflo, hielt nach altem Herkommen, die Schäfergilde zu Rotenburg in Franken, soviel Teilhaber drei Meilweges im Umkreis um diese Reichsstadt weideten, den jährlichen Umgang, und nachdem sie in der Sankt Wolfgangs-Kirche vor dem Klingentor Messe gehört, zogen sie ins Wirtshaus zur.

## 宝物探し

ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウス著

鈴木満訳・注・解題

皇帝ヴェンツェル<sup>①</sup>が綺麗な浴室係の乙女とともにプラークでの拘禁から逃げ出した歳の、バルトロメウス祭<sup>②</sup>も過ぎた火曜日のこと、昔からの慣わし通り、フランケン<sup>③</sup>はローテンブルク<sup>④</sup>なる町の羊飼いの同業組合<sup>キルドルト</sup>——組合員はこの帝国直属都市の周囲三哩<sup>マイル</sup>で放牧している者たち——は例年の練り歩きを行い、クリンゲン<sup>トリア</sup>門<sup>⑤</sup>の外にある聖ヴォルフガング教会<sup>⑥</sup>でミサを聴聞したあと、旅籠屋の黄金蒸亭<sup>キンコウテイ</sup>に場所を移して、一日中どんちゃん騒ぎで暮らした。笛やシャルマイ<sup>⑦</sup>を吹き鳴らし、市の立

つ広場で日暮れまで羊飼ひ踊りを踊った。それから若い人たちはまた町の外に三三五五出て行ったが、年寄りの裕福な牧人連は葡萄酒の壺の周りに群れ集い、夜更けまで酒盛りをした。葡萄酒が舌の枷を弛めると、彼らは声高になり、さまざまなことをしゃべり散らした。幾人かは、当世の好い加減な風向き観測者に負けず劣らず、日和をとっくり見定めて天気の子測をやったもの。マリア様が山地を越えていらした時のご機嫌とか、七人の眠れる聖者様がたの星相が晴れだの曇りだのとか、曠野草の花の具合とかから判断したわけだが、シユレスヴィヒのお天気占いの雄鶏の啼き声よりはよく的中した。もつとも彼らは灯火を祖国全ドイツの燭台の上に立てたわけではなく、いわばただ柵の下で予言しかかったに過ぎないのだけれども。また、若い頃遭遇した異常なできごとを物語る者たちもいた。忠実な番犬のお蔭で牧群から狼を撃退したとか、狼のおっかない兄弟分ともいふべき人狼を靈験あらたかな聖アンドレアス様の祝福で駆逐したとか、あるいはまた、曠野とか森とかで魔女や妖怪に夜分からかわれたり脅かされたり、といった、彼らが聞いたたり、見たり、体験したりした不可思議なことどもである。こうした噺のあるものはとても恐ろしかったので、聴き手のなかに居合わせた町住まいの連中はぞぞつと鳥膚が立つたり、頭の毛がおっ立つ思いがした。というのも、庶民層の実直な町人衆の中には、鄙びた羊飼いたちの祭に加わって、仕事じまいの一刻を楽しんでいる連中がいたからである。大勢の同業組合員や職人たちが黄金羔亭の酒場にやって来て、一シヨッペン(15)の葡萄酒を買い、こうしたおしゃべりに一緒に耳を傾け、口を挿し挟んだりしたものだ。

上述の宵のこと、信仰篤い大牧人ヤコブのように、羊飼ひの一族がまるまる一つ己が腰から生まれ出たのを目の当たりにした陽気な八十歳のご老体である銀髪のマルティンは殊の外朗らかで能弁だった。酒場の客たちがまばらになり始めたので、彼はこれでおつもりにすることにしてもう一杯熟成葡萄酒を注がせた。周りの騒騒しさが静まったのも、また話題を持ち出すことができるのも悪い気分ではなかった。「皆の衆」と彼は口を切った。「おまえさんがたは



anfangs ging mir's gar kümmerlich in der Welt. Als ein verlaßner elternloser Knabe, muß ich mein Brot vor den Türen suchen, hatte keine Heimat, war aller Orten zu Haus, und zog mit meinem Ranzen, von Dorf zu Dorf im Lande herum. Wie ich heranwuchs, stark und bengelhaft wurde, verdang ich mich als Bub bei einem Schäfer, auf dem Harz, und diente ihm bis ins dritte Jahr bei den Schafen.

dem Harz, und diente ihm bis ins dritte Jahr bei den Schafen.

随分と珍しい見聞をしゃべくつたのう。中にやなんともかんと妙ちきりんなのもあった。だがな、わしにや思えてならんのだが、酒ちゆうもんが割り込んで嘶おひれに尾鱒おひれを付けることがよくあるもんだで。わしも一つ知つとる。こりやわしの若い頃に出くわしたこんだ。わしや、これにや混じりけなしの真実しか入れとらんが、おまえさんがたのしたやつのだれよりも不思議だなあ、と思えるだろうて。だがもう夜も更け過ぎたで、しまいまで話すわけにやあいかん」。尊敬すべき年寄りが口を開いたので、一同は黙りこくり、酒場はさながらバンベルク(18)の司教(19)が読誦どくじゆミサを上げているかのようにしんと静まりかえっていた。だが、ご老体が黙ってしまったので、周囲はわいわいという騒ぎになり、同席の連中や仲間たちが異口同音にこう叫んだ。「マルティンとつつあん、あなたのおもしろい嘶を聴かせてくれ。なんだって出し惜しみるんだね。仕事じまいだでわしらしやべつてくれろや」。丁度家に帰ろうとしていた何人かの町者さえまたぞろ外套や帽子を掛け鉤かぎに引つ掛け、お別れにその奇譚を話して欲しい、と勧めたもの。こうやいのやいのとせつつかれて抗あがうわけには行かず、マルティン爺じいさんが物語つた次第はあらざつとかくのごとし。

「わしの世渡りは最初はほんとに惨めだった。寄る辺ない親無し鬼だったで、わしや他人ひと様の飯を喰わなきゃならんかった。故郷ふるさとなんちゆうものは持たず、どこもかしこもおいらの住まいってやつよ。背囊せいのう背負つて村から村へ國中歩き回つたもんさ。背丈が伸びて、頑丈で小生意気になると、ハルツ(20)の牧羊家のところを下働きの小僧として雇われてな、三年目まで羊の世話して奉公したつけ。その年の秋の初め、ある日の夕方、小屋へ追い立てて戻ろうちゆう時、群の羊が十匹足りなかつたで、下



だが、わしはその場から動かなんだ。すると唼しやがれた怒鳴り声でこんなことを言うのが聞こえた。『臆病者め、勇気を出せ。わしはハルツの宝の番人だ。わしと一緒に来い、そうすれば宝を掘り出させてやるぞ』。怖くって死にそうな冷や汗を流しとったが、わしやとうとう度胸を奮い起こして胸で十字を切つてな、こう言つたもんじゃ。『悪魔サタンよ、退しりぞけ、おいらおまえの財宝なんぞ要らねえ』となあ。すると精霊は顔を擧しかめて『この間抜け、きさま、せつかくの幸せをばいしとるんだぞ。そんなら生涯すたれ者のままでいるがいい』と怒鳴ると、背を向け、行ってしまおうとした。が、また戻つて来ると、こう言うた。『よく考えろ、よく考えろ、この餓鬼めが。背囊を一杯にしてやるだぞ、

男頭が、森中で捜して来う、とわしに言いつけた。犬が見当違いをやらかしたので、わしや茂さきよみん中を彷徨さまよつてな、とうとう夜になつちまつた。その界限にや不案内だったし、帰り途みちを見つけることもできなかったで、一本の樹の下で夜を明かそうと決めた。真夜中に犬が落ち着かなくなつての、くんくん啼きだしたもんだ。どうもここらは怪しげだ、と気づいたわしは辺りを見回した。すると明るい月の光で見えただ、体中毛むくじやらの男みたいなもんがわしの向かいに立つとるのをよ。こやつ臍まで届く長い髻を生やし、頭にや枝冠を巻き、腰に檜の葉っぱでこさえた腰巻を締め、右手に根扱こぎにした樅の木を携えておつた(一)。わしや白楊やまなすしの葉っぱみたいにいぶるぶる震えてしもうた。妖しい化け物は自分に随いて来るように手招きした。

合切袋がっさいを一杯にしてやるだぞ』。『録しるされてることだぞ』とわしやあ返答した。『誘惑ごうなんぞ止めるがええ。化け物め、おいらからさつさと離れる。おいら、おまえなんぞと何の関わりもねえ』。

精霊は、わしが聞く耳持たねえ、と見てとると、しつこくするのをよしにして、『きさま、後悔するぞ』とだけ言い、悲しそうにわしを見つめ、しばらく思案してから、こう続けた。『これからわしがきさまに言うことを憶えて、物分りがよくなりゃあ、いつか役に立つかもな、と気に掛けておくこつた。黄金や寶石といった途方も無い財宝がブロッケン山の地下深くにしまわれておる。これは薄明かり時に移されたで、掘り出すことができるのは、明るい真昼間と真夜中だ。わしは七百年このかたその番をしとる。だが、今日からはまた見つけた者がそれを取ることができ、所有者のおらん宝になる。わしの年季は過ぎた。だからわしは、それをきさまにくれてやろう、と考えたのだ。きさまがブロッケンの上で放牧しとるだで、きさまが好きになったゆえのう』。それから精霊は、どこで宝が見つかるはずか、どうすりゃわしがそれを手にすることができるか、教えてくれた。今日のうちにあつたことみたいに思えるわな。精霊の言葉を一言一句憶えておる。『アンドレアスベルク22へ行け』とあれは言うた。『そしてそこで黒い王ケーニヒスツールの谷、今では朝モルゲン飯谷ローツツールと呼ばれておるが、その谷のことを訊け。きさまが、ドゥーダー、またはエーダーという小川の岸辺に着いたら、それに従って行け。流れを遡ってな。すると製材水車小屋がくつついている石の橋に行き当たる。橋を渡らず、小川の右手を上り続けると、高い岩壁の前に出る。そこから矢が届くくらいのところ23に崩れた溝があるのに気づくだらうて。そら、死人を埋めるような溝がな。溝が見つかったら、落ち着いて土を除けるのだ。辛い仕事をやることになろうが、それでも、土が丹念24に中に放り込まれたんだな、と分かるうさ。両側が固い石になつたら、更に仕事を続ける。間もなく四角い板石が埋め込まれているのが見つかるだらう。高さ24と幅が一エレだ。こいつを壁から引くつ剥がせ。それが宝庫の入り口だ。この入り口からは、きさま、腹ん這いで潜り込まにゃならん。口



に坑内用の角灯ツルツエルくわえてな。鼻先を石にぶち当てぬように、両手を使えるようにしとくこった。中は急な下り坂で、尖った石だらけだ。膝小僧ひざこぞうをすりむいていくらか血が出ても気にすることはない。事はうまく運んでるだでな。幅の広い石段に辿り着くまで休んではならん。そこからゆつたりと七十二段下へ降りると、三つの扉がある大きな広間の中に出る。扉のうち二つは開いとるが、三つ目は鉄の錠と門かんぬきで固く鎖とぎされとる。右手の扉を入つてはならん。昔の宝の持ち主の遺骨の安息を乱さぬようにな。左手の扉にも入つてはならん。こりやまむしや蝮まむしやら他の蛇どもが果食うておる蛇の室むろだ。で、錠の掛かつた扉をよく知られた開錠根シユプリング・ツルツエルを用いて開くのだ。こいつを携えるのを忘れてはいかん。さもないと、苦勞は全部水の泡、工具や鉄槌かねてこを使つても何もできぬぞ。開錠根シユプリング・ツルツエルをどうやって手に入れるかは、経験豊かな獵師に訊くことだ。そいつはありきたりの狩の技術でな、開錠根シユプリング・ツルツエルを手に入れるのは難しいことではない。扉がずしんばりばりという、射石砲とびをぶっぱなしたみたいな大音響を立てて開いても、怯えるでないぞ。きさまは何も危ない目には遭わぬ。それに力は

開錠根シユプリング・ツルツエルから出るだでな。消えぬように気をつけて角灯に蓋をするのだ。中の穴蔵の壁や柱にやべた一面の黄金や寶石が素晴らしく光り輝いているだで、盲目めくらになつちまうんじゃあ、と思うだろうよ。したが、そっちへはちよつかい出さぬよう用心せい。こりや教会の略奪をやらかすようなもんだあ。地下蔵の真ん中に銅の長櫃が一つある。教会の高いご祭壇に似ておる。この中に金銀がたっぷり見つかる。きさまはそれを好きなかだけ取つていい。持てるだけ取れば生涯にやあ充分だが、三度までは戻つて来ることが出来る。四度目にやあきさまの企ては無駄になろうし、欲張

りの罪でしたたかに罰を受けて、階段から足を滑らせて片脚をおっべしよるだらうて。宝を持ち出したらそのつど穴に土を埋め直すのを忘れてはならぬぞ。ブルクトリクス王の宝蔵へときさまが掘り開けた穴をなあ(2)』。

精霊がこう言い終わると、犬は両耳をぴんと立てて、わんわん吠え始めた。遠くで荷馬車の御者の鞭がぴしりと鳴り、車輪がごろごろ音を立てるのが聞こえた。そしてわしがふとあたりを見回すと、妖怪は消え失せとった」。これで白髯の見霊者(3)は彼が遭遇した奇譚を語り終えた。この噺は人によって全く異なった印象を与えた。これを物象いの種にして「とつつあま、あんたは夢え見たんだべ」と言つてのけた連中もいれば、すっかり信じ込んだ人人もあった。更にはまたごく用心深い者たちは分別臭い顔をして、あからさまに物を言おうとしなかった。黄金羔亭の主人は大層抜け目の無い男だった。その個人的見解は以下の通り。論点に最も確実に決着を付けるのは事の成否などで、問題は全て、とつつあんが地面の下への遍歴をやらかして、背囊を一杯にして明るい所へまた出て来られたのか、そうじゃなかったのか、ということに掛かっているんだ、と。おしゃべり機嫌を盛り立てようと、彼は爺さまに栓を抜いたばかりの壇からもう一杯酌をして、気の置けない口調でこう訊ねた。「マルティンとつつあん、あんた、山に行つて精霊が約束してくれたもんを見つけ出したのかね。それとも、精霊はあんたに嘘をついたのかね。「うんにゃ、決して」と白髯の律儀者。「わしゃあ、精霊を嘘つきなんぞと責めることあできねえ。だってな、わしゃ、その溝を捜すとか、土を浚い出すなんてことあ、これっぽっちもせなんだでの。「して、どうしてやらなかったのかね。「わけは二つつあった。一つにはな、悪魔のわるさに払ってやるにゃあこの首はどうにも惜しかった。それからの、どうすりゃ開錠根が手に入るのか、つまり、そいつはどこに生えとるのか、どの日のどの刻限に掘らにゃならんのか、わしに教えてくれる人間がこれまであったためしが無かったからさの。随分と手練れの獵師にそのことを訊いてみただが」。黄金羔亭の主人は探りを入れてみたものの、何も分からぬまま引つ込まなければならなかったが、その代わり同

席していた年取った羊飼いのブラスが声を張り上げてこう言った。「なんともかとももつたいねえこんだ、マルテインとつつあん、おめえさまの内緒ごとがおめえさまと一緒に歳を喰っちゃまったのはなあ。四十年前に打ち明けてくられてたら、開錠根は、誓って言うけど、おめえさまの手に入っていたのによ。おめえさまあ、もう決してブ

ロツケンのお山に登るこたあなかるうが、それでも気慰みに、どうすりゃそれをものにできるか、聞かせて進ぜよう。一番楽に捗るのは熊啄木鳥の助けを借りることだ。春にやつがどこの木の洞に巣を作るか憶えておく。そうして卵から雛が孵り、やつが餌を捜しに巢から飛び立ったら、巢穴の口に頑丈な枝の束を押し込む。木の蔭に隠れて鳥が雛に餌をやりに戻って来るまで、じいっと待つ。巢がしつかりと塞がれているのに気づくと、鳥は心配そうな啼き声を挙げて木の周りをばさばさ飛び回り、それから不意にお天道様の沈む方角に飛んでくだろうて。そうなったら氣をつけて真っ赤つかの外套を捜し求めとかにやいかん。それともそいつの持ち合わせがなけりゃ、小間物屋に行つて四エレの赤い布切れを買い、服の下に隠しておく。そうして木の所で一日か、そうさの、二日くらい張り番するだ。すると啄木鳥が巢に戻つて来る。開錠根を嘴にくわえてな。奴がこれを巢穴に嵌め込まれた栓に触れると、栓は洞からおつそろしい勢いですっぽ抜ける。醗酵している葡萄酒壘からコルクの栓がすつ飛びよういの。そうなつたらすばしこく赤い外套か布切れを木の下に抜ける。すると啄木鳥は、火事だ、と思い、びっくりして根っ子を落とす。木の下であまり煙の出ない、ちっぽけな焚き火をほんとに燃やして、鹿の子草の花をその上に撒き散らす手合いもあるが、こりや感心できん遣り口だて。火がうまく早いとこ燃え上がればええが、さもないと啄木鳥は飛び去ってしまう、根も持つてつちまう。さあて、こいつが手に入ったら、毎日これに黒梅擬の切れっぱしを結びつけるのを忘れないこつた。というのは、根っこをただほつたらかして置こうもんなら、その効能を味わわんうちに消えて失くなるだろうからよ」。この方法についてもあれやこれやはたから居酒屋流儀のお談義が加えられ、常連の飲み仲間



がお開きにする前にとつくに真夜中になっていた。

団欒だんらんからまるきりぼつんと離れ、傍に居るのは犬と猫だけ、暖炉の後の旅籠屋の亭主の革製の安楽椅子に一人の常連客が座り込んでいたが、宵中ずうつとしんと黙りこくり、まるで、カルトウジオ会派の修道院33へ加入誓願の準備をしているみたいだった。もつともいつもこんな瞑想精神を持ち合わせていたわけではない。だが今回はすっかり自分の中に閉じ籠り、一つならざる理由によって惹き起こされた深い物思いに耽たっていたのである。元はある賢明な市参事会および市全般ガールコッホ34の調理主任にして葡萄酒庫管理人、その後水道管理人、最後には無職の食い詰め者、といった具合にペーター・ブロッホ親方は、幸運と栄誉の長い階梯を一段一段しよつちゆう下へと降くだって来たのであつて、葡萄酒庫管理人から水道管理人という歴然とした格下げがそれを思い知らせている。こうした格下げは帝王と寺男との差35とまずまあさしたる相違は無い。彼は以前裕福だった時には快活な男で、生まれながらの冗談好き。請け負った祝宴では客の心も胃袋も同じように豊かに楽しませることができた。料理の腕と来たら余人がこれを凌駕することは容易ではなかつた。大雷おおらいちよう鳥あひを黄蓮わうれん風味の甘い汁パイヨン36で調理したり、色色な魚で嵩高かさだかな凍膏せりの山をこしらえたり、同様に味なシユナン葡萄酒味平丸菓子フラデー40、榲桲まろめろ41を餡にした焼き菓子、軽焼き煎餅入り菓子オブラーテを焼いたりする技を心得ていたし、それから彼は豚の頭料理43の耳には悉く黄金箔きんぱくを貼つたものだ。ブロッホ親方はかつて配偶者つれあいを探したことがある。けれども不幸なことに彼は、蝮まむしのように咬む辛辣な舌鋒のために市全体に悪評高いご婦人を選んでしまったのだった。うっかり彼女に関わりあつた者は友だちだろうが敵だろうがお構いなく、一息で九種類もの罵詈譏ばりげんぼうを浴びせ掛けられる始末。天国の聖人様方だつて憚ることのない女で、その悪口年代記についてはシユニプス夫人(4)のおもしろおかしい思い出同様よく知られていた。ただし彼女はビュルガー氏の実り豊かな気分によつて胚胎はいたいされた後者は異なり、大向こうの人気を博するわけにはまいらなかつた。完璧44イルゼは徹頭徹尾嫌われていた。若者たちは七里しちり



ollbrechts Ilse,  
Niemand will se,  
Die böse Hülse:  
Da kam der Koch,  
Peter Bloch,  
Und nahm sie doch.

結界<sup>けっかい</sup>彼女を避けた。なにせどの男の子にも手ひどい綽名を付けていたもんだからね。そういうわけで彼女は棘<sup>とげ</sup>があるのでだれも手を出さない野薔薇<sup>(15)</sup>の実み<sup>(16)</sup>たいに熟し過ぎになってしまった。とどのつまり、彼女が手も八丁で所帯の切り回しがうまい、との仲人口に乗ったペーター親方が、イルゼに求婚しよう説得されたのだった。そこで一つの落首<sup>らくしゅ</sup>が町中に広まったが、これはこんなものだった。

完璧イルゼは

だれにも好かれん

しょうわるひいらぎ、  
性悪<sup>しょうあく</sup>柎<sup>ぼ</sup>、

そこへ厨宰<sup>ちゆうさい</sup>

ペーター・ブロッホ

それでもこいつを嫁さんに。

新婚夫婦が教会の祭壇から戻ったか戻らないかのうちに、もう婚礼行列の先頭で口喧嘩がおつ始まった。町の葡萄酒庫管理人は、自分の晴れの日とあって心愉しいまま、逆に葡萄酒に管理されてしまっており、そういった成り行きになるのは普通の週日になつてあることだったが、花嫁の腕に千鳥足でよろめき込んだのである。そこで早速激しい



口論が起こり、結婚暦が新郎新婦に予言したのは荒れ模様陰鬱な天候、電と豪雨を伴ったひどい雷雨、太陽はろくすつば顔を見せず、冷たい夜はどつきりこだった。

予言は最後の一点に至るまでどんぴしゃりとの中。採め事の絶えないこの夫婦がその後こしらえた豊かな子宝は、少なくとも時折は肥沃な天候とほの暖かい幾夜かがあるかな、と思わせたんだけどね。さはさりながらペーター親方は長いこと、とうちやま、と廻らぬ舌で可愛く呼ばれる悦びを味わわなかった。つまり、彼の血統と来たらずく死ん

でしもう子ばかりで、呱呱こごの声を挙げたと思つたらすぐにもう、寒い冬の仔山羊みたいに激しく痙攣けいれんして息を引き取つてしまふのだった。がみがみ女の癩癩はかぐわしい母乳という滋味溢れる汁を汚染し、腐蝕性の毒人参の汁(6)に変え、それをいたいけな乳呑み児が生命の源から飲んだのだ。

ペーター親方は大した財産を相続していたわけではなかったが、それでも跡継ぎの子どもがいまままではおもしろくなかった。こうした悪い星回りをしばしば隣近所の人たちに嘆き、子を埋葬するたびに言ったもの。

「桜の花にまた雷が落ちたでな、実が熟さねえだよ」と。そこである聡明な女が彼の家系の死に易さの原因をあからさまにしてやったので、息子が生まれた時、彼はこの

坊やを健康な乳母の胸に預けた。少年は育つて強くなり、父親は有頂天になった。親方はこの大事なゲオルク坊主を自分だけで躰け、監督。ズボン履かせてからは、学校へ上げる代わりに厨房へ連れ込み、美味珍味の与え放題、かくしてこの子をちいちゃな大喰らいに仕立て上げた。お客様方に食事の仕度ができた昼時ともなると、この子は待ち構えていて、皿の小さい肝臓に手を伸ばしたり、鶏冠料理を指差したりしたもの。そうすると甘い父親は、欲しがっている美味しい食べ物にちよっぴり塩を付けて、すぐさまちび公にくれてやるのだった。けれども子どもが母親が居合わせているところでそういった珍味をせしめようとすると、大目に見てはもらえなかった。彼女はこうした不行儀をきんきんきんきんつけ、おまけにちびの食いしん坊の指を玉杓子でひっぱたいしたもの。可愛い子どもは泣き、父親は憐れで堪らず、親方の手から牛酪が火の中へ落ちる。そうすると彼は猛然たる山の神に向かってフランケンのお国訛りで穏やかにこう懇願。「女房、童こさ鶏の腿こば呉てやれじゃあ」。優しい父親はこんな具合に訓育を施していたわけだが、これは七歳まで。てのは、この子、その時食べ過ぎで死んでしまったから。子どもたちの中で彼に残されたのは娘がたった一人。この女の子はまことにしっかりと節度ある性質で、母乳の非沃斯越幾斯にも父性愛に発する肥育にも毒されずに済んだ。彼女は厳しい母親と甘い父親の下ですくすく育つて綺麗になった。そこで後者としては、可愛い娘が生まれたのは、悪魔が所帯に卵を生みつけた、ということだ、なんて言い種を信じることは決して無かった。

そうこうするうち一家の運勢はとみに変化した。ペーター親方は若い頃算数の時間に怠けていたので、加減乗除の四則のうち引き算以外は皆自分からなかった。足し算と掛け算はどうにも合点が行かぬ。割り算となると生涯かかずらわりもしなかった。家計で支出と収入の均衡を保たせるのは彼にとつて大層骨の折れる仕事だった。金が入れば、調理場と酒蔵にたっぷり補給、食事客である取り巻き連中に好きなだけ信用貸しを許し、おもしろい笑いをしゃべ

ることのできるのんびり屋どもには酒代をただにしてやり、彼に絶り寄って同情をかう術を心得ている貧乏人の胃袋を一杯にした。錢箱が空になれば、高利貸しから法外な利子で借りた。そして口喧しい女房の嬢天下ぶりがおっかないものだから、こりゃあ返してもらった貸し金だ、なんてきつい悍婦に言い訳をした。彼のゆつたりした性格に全くもって相応しい原理原則、また他にもたくさんの暢気な料理店主の物の考え方の基礎になつてるのはこういうやつ、すなわち、しまいにやなんでもうまく行くだろう。そこでしまいにやほんとにペーター親方は身代限りの憂き目に遭つて、生まれ育つたこの町の食いしん坊や美食家たちが皆残念がったことに、御酒御料理の看板を下ろさざるを得ない羽目に追い込まれた。でも彼はその調理の腕前で大勢の鼻屑客を得ていたから、賢明な市参事会は気の毒がって、水道管理人という取るに足らない職をあてがってやつた。なにしろお歴所としては、帝国直屬都市ローテンブルクじやあ調理主任が飢え死にしたんだとよ、なんて中傷されては、と心配だったからね。もつともこのささやかな職にありついても元料理人は幸せな星回りには恵まれなかった。ユダヤ人住民が水道に毒を入れた、という噂が立ち、それから凶暴な騒乱が起こつて、ユダヤ人たちが一部は惨殺され、一部は町から放逐されて全財産を略奪されてしまった。もともと町の性悪な賤民どもがこんなでたらめを流してこいつをもくろんだわけ。けれどもペーター親方としては、ちゃんと注意深く貯水池を見張っていなかった、と非難されて、いわれもないのにこの折水道の仕事を失つたのである。いまや彼はなんとも途方に暮れた。土掘りはやりたくないし、物乞いは恥ずかしい。立派な奥様が真つ黒けな鍋を自身火に掛け、厨房を取り仕切るのをなんとも思わなかったあの儉しい時代には、身分の良い家庭でも料理人の需要なぞまるきり無かつた。ガリア「ゴール＝フランス」料理がドイツ人の舌をまだ贅沢にしていなかつたのだ。この惨めな境遇で彼は辛辣な女房殿のお情けで暮らさなければならなかつた。彼女は細細と粉の商いをやってかつがつ生計を立てていた。喰わせてもらう代わりに彼はかみさんに驢馬の労役を提供した。驢馬は、もしこうした代役がいな



ければ、この新しい稼業ではどうしたって必要欠くべからざる家畜だったのである。彼女は愚図な連れ合いの不慣れた背中に重たい穀物袋を数多く背負わせ、こちらはそれらを喘ぎながら水車小屋に運び、それと引き換えにあたじけない食事をあてがわれた。そして日日の勤めを全うしなければ、復讐の天使が拳骨を固めて彼をしたたかにぶん殴るのであった。

心優しい気立ての良い娘はこれが可哀そうで堪らず、声を吞んで涙を流すこともしばしば。彼女は父親の掌中の珠で、小さい頃から彼流儀でちやほや可愛がったし、彼女の方も子どもらしい甘えぶりで父性愛に応えた。そしてこれは善良な父親にとつてあらゆる家庭の不幸の慰めだった。優しいルツイーネは糊口を凌ぐ生業の種として縫い針を選

んだ。そして彼女は針仕事、それも特に針での造形美術に掛けては大層熟練した技能に達した。その目が見たものを、その手が作れたのだ。彼女はミサ用の祭服、教会の聖壇垂布、当時用いられた高価な彩り豊かな食卓掛けを刺繍、旧約聖書の数数の物語を、世界創造から貞潔なスザンナに至るまで毛織物や絹織物に縫い込んだもの。そして仮に彼女が我らの同時代人だったら、ツエレのあの技芸に長けた三人姉妹と張り合って、絹のような女の髪の毛を針に通し、目を欺くばかりの腕前で銅版彫刻の鑿が生み出す作品を真似たであろうことは疑いの余地無し。仕事で得たお金を彼



女は厳格な母親にそっくりそのまま渡さねばならなかったし、家全体の入費にそれを当てるのは嬉しいことではなかったのだが、それでも時折彼女は三バツツェン貨一枚だけ母親の目をかすめ、取っておいて、父様にひそかに握らせてやることができた。お蔭でペーターはこっそりどこかの居酒屋に寄り、こいつを愉しめた。前述の羊飼いの時、彼女は二倍の酒代を用意して心嬉しく、夕刻、水車小屋から戻って来て、ずっしり詰まった粉袋を肩から下ろしたばかりの、咽喉を渴かしている父親の手にこっそり押し込んだもの。パパはそのお礼にいとしい娘に限りなく優しい顔を向けた。こういう表情は、彼のところの雌の龍が背負わせる重荷に危うくへたばかりかけても、彼には思うままにできた。「うちの雌の龍」とは、ギヤあつくわめく伴侶のことを陰で、もっとも至極な熱心さをこめて、ペーターがよくそう口にした形容である。愛情に満ちた娘の温情が今回心魂に徹した親方は、ひどく感動して目に涙を浮かべた。

なぜなら、彼は長いことある計画を温めていたのだが、この晩練り上げるつもりだったので、そうすれば、人の好い娘からもう鏝一文飲み代をもらうなんてことはあるまい、と彼は考えたのである。最初の物思いに沈んで、彼は通りをぶらぶら下って行き、黄金羔亭に入ると、常連客の雑踏を押し分けて、一シヨッペン葡萄酒を注文、それを持って、一座の仲間に加わらずに暖炉の後に据えられた旅籠屋の亭主の革張りの安楽椅子に座り込んだ。この椅子は大いに快適だったにも関わらず、位置が引っ込んでいたため、空いたままだった。酒が緊張を解かれた神経の渦をちよっと締め直し、動物精気を活気づけ終わ

ると、ペーターは考えを自由に廻らせ、綺麗なルツィーネに関して彼になされた危なっかしい提案をとっくりと思索した。

ある若い変わり者で職業は絵描きだが、そのもつと近代の芸術家仲間である、二巻の大冊で出版され、読書界でまことに陳腐な一役を演じている、かの名高き宮廷の若き画家(5)とほぼ同様の頭でっかちの浅薄な男が、ローテンブルクでその技芸に従事するため、この地に居を構えた。女人の美しさの最高の理想像こそその主要研究だった。家の窓辺であれ、公道上であれ、はたまた教会の中であれ、容姿端麗な女性を見つけると、羊皮紙の画板を引つ張り出し、鉛筆でその姿を模写し、それから油絵の具で彩色、聖ヴェロニカ<sup>(58)</sup>だとか、聖母<sup>マドナ</sup>だとかとして色色な修道院に売りとりわけこれに帰依信心する年若な修道士たちの許に結構な賤路を開拓した。ご聖体の祝日<sup>(59)</sup>、練り歩く厳かな行列で美しいルツィーネが真つ先に画家の目に留まった。彼は大意で赤鉛筆を手に取ると、素晴らしい顔形を描きつけた。けれども彼女は壁に映った影法師のように簡単に写し取れるようなありふれた容貌では無かった。魅惑的な乙女の表情は相互にとても柔らかく溶け合い、その美貌はいかにも繊細に彫琢されていたので、模写は到底本物に及ばぬ。芸術家は想像力の援けを藉<sup>か</sup>りて最初の下図からあの愛らしい顔<sup>かほ</sup>を<sup>はせ</sup>絵筆で再現しようと骨折<sup>(60)</sup>したが、なんとしてもうまく行かない。原型に較べると依然として生硬な頭巾<sup>(61)</sup>掛け<sup>(62)</sup>みたいな代物。それゆえ彼はかつとしてぎこちない仮面をまたまた塗り消してしまった。

その後間もなくさる裕福な伯爵が新築の館の装飾として、彼にいくつかの絵を注文した。これには伯爵自身着想を告げた。中心部分はウエヌスの誕生を表わしたものとす。ウエヌスは麗しき自然の傑作として海洋<sup>わたつみ</sup>の中から出現するところ。神神や海の怪物たちに讃嘆の目で見つめられながら。この構図を考えると、元調理主任<sup>ガールコック</sup>ペーター・ブロッホ親方の美しい娘ほど愛の女神を描き出すための完璧な雛形を画家は知らない。ただ問題は、淑やかな乙女が、芸術



家が天然そのままに描こうと意図しているその体型で女神を表わすために、その魅力のありつたけを彼の目に委ねてくれるかどうか。この目的に通じる最も真つ直ぐな道を取ろうと、画家は直接父親に持ち掛けることにし、わざわざ用事を彼に頼み、色色な顔料を磨り潰してもらい、その骨折りにたっぷり礼をした。こうして知り合いになると、画家はある日親方を居酒屋に連れて行き、したたかに酒を飲ませ、客人が上機嫌になった潮時を狙って、頼みごとを切り出した。同意してくれた場合は莫大な謝礼をする、との約束を添えて。しかしペーター親方はこの一件をいかがわしいことと思ひ、ぶしつけな申し出にひどく立腹、画家が、持つている、と自称する、芸術のために美しい自然の面紗ヴェールを揚げる、という権限を、美しいルツィーネの名誉と美德に対する不純なもくろみではないか、と疑い、憤然たる身振りでこう言った。「旦那はどういうつもりなんです。冗談でしたのかね。それとも真面目な話だともおっしゃるんで。旦那は、わしの娘を羽根をびしった雛鳥みたいに丸裸にして売ってくれ、とお望みなんですかい。羽根をびしった雛鳥ならわしやあ以前調理主任ガメルツボだった時売りましたよ。だけど、娘を丸裸にして売るなんざ、れっきとした帝国市民「神聖ローマ帝国直屬都市の住人」にやあ似つかわしくないこんだ」。芸術家は、客人の調理主任に本来の事の仔細を説明するのに、弁舌の才を総動員しなければならなかった。彼は親方に大ギリシアの自由帝国都市クローフイエ・ライヒス・ユルツトンの例を挙げた。昔ここではね、賞賛すべき市民たちが競って大いに熱心に、その町の最も美しい乙女たちを同じ目的で、私の芸術上の同輩である画家のゼウクシッポスの画架の前に立たせたのだよ、乙女たちは自然の手から生まれ出たそのままだったのだけど、処女の名誉も評判も損なわれはしなかった、それどころか、この巨匠が愛の女神の理想をそれぞれから集めて拵え上げた五人の選ばれた美女たちには縁談が降るよううで、その上詩にも詠うたわれて褒め讃えられたんだ、うんぬん。

こうした実例はいかにも納得が行くものだったが、堅物のローテンブルク市民にはさして感銘を与えなかった。現

代ではあるインドの副王が、アウドの美姫たちをギリシア風の衣装で衆目に曝した(6) 廉むらで責任を取るべきだ、とされているが、ああした面倒な手順を慎み深いルツイーネに踏ませるのは不穩当だ、と彼は思ったのである。「ねえ、あんた、よく分かるよ」と絵描きは言った。「私たちがこの取り引きで折り合いが付かないのはね。あんたは自分の好きなように決められるさ。でもね、立派な料理人として損得を良くわきまえていたら、この現金で並べたグルデン金貨(6)二十枚の代わりに、造形美術に目の保養を提供するのを断つたりしないだろうになあ」。黄金の輝きを目の当りにすると、帝国市民の厳格な節操はぐんにやり弛たるんで油鞣革セキみたいな柔らかくしなやかになった。ペーター親方が置かれている窮乏状態にあつてはこれだけの金額はなんとも甘美に過ぎる誘おびき餌。彼は一枚のグルデン金貨をどんな風を楽しめるか考えてみた。そして二十回こうした楽しみを繰り返したら、すっかり思いあぐねてしまった。彼はこの件をとっくり思索し、綺麗なルツイーネを芸術家の手にそれとなく渡す方法を検討する、と約束、彼女の隠された魅力の数をどうすれば見届けられるか考えるのは絵描きに任せた。そうした不道德な好意を示すよう自身娘を説得するなんて、到底自分にはできない、と彼はあからさまに告白した。世慣れた若造わかぞうは町者のこういうこせこせした小心ぶりを笑い飛ばし、この点をうまく執り行うことは我が身に引き受けた。「ペーターとつつあん」と彼は言った。「女の子を剥むき立て卵にするのは私にやおそろしく難しい、と思ってるんだね。旅人の旅行外套を取ろうとしたお天道様と突風の競争の話を知らないのかな。大風が轟轟吹きつけてもできなかったことを、お天道様は穏やかな日差しでやってのけたんだ。勿論あんたじゃ綺麗なルツイーネは着物を脱ぐよう説得されまい。あんたは突風みたいになるだろうからね。でも、私はぼかぼかした日差しになるよ」。

画家のドゥンス「ばか」(6)との契約は締結されたも同様。問題は品物の引渡しだけ。そしてこれにはペーター親方はまだ少なからずためらいを感じていた。彼は黄金羔亭の亭主の安楽椅子にもう何時間も座り込んでいたが、仕組んだ

企みをどうすれば実現し、乙女を母親の目からこっそり連れ出し、うまく顧客の許に届けられればいいのか、すんなり進められないままだった。万一慈しみの女神イルゼが実の娘に対する父ペーターの大逆罪を知ったら、結婚の地平線にどんな雷雲がもくもくと湧き起こり、どれほど稲妻と雷鳴が自分に落ちかかるか、と考えるたびに、彼の額を恐怖の冷や汗が流れるのだった。それでなくても良心の槌が彼の心室を激しく叩き、本当なら子どもらしい温情がネクター<sup>(68)</sup>に変えてあげたい、と思ったことだろう。葡萄酒の一滴一滴が胆汁と苦蓬<sup>(69)</sup>の味になるのだった。あの可愛い娘がパパに元気づけの酒を飲ませよう、と一ヘラー、一プフェニヒと儉約してくれたのに、こちとらと来たらその酒を、その娘の嫉<sup>(70)</sup>と羞恥心を苛酷な試練に遭わせる陰謀に踏み切るための元気づけにしているのだ、と思ひ至るたびに。全てを勘案してみると、己の肉が結んだ果実で不当な暴利を貪るのは、父親としてまことに以て見上げた行為とは必ずしも言い難いこと。文学上の黒人奴隷貿易請負によって、精神の所産だ、などと言いつてもらうのが関の山(7)。

がつがつする貪欲と昔のドイツ人らしい実直さが相互に苦闘しあい、どちらが勝利を収めるかまだ疑問だった折も折、マルティンとつあんが自分の遭遇した奇譚を語り始めたのだった。この奇怪な出来事は暖炉のうしろの隠者の注意を惹き、彼は争う両派に休戦を命じ、嘶がよおく聴き取れるように、両耳の鼓膜の背後に全神経を集中した。彼は一言も聞き落とさず、マルティンとつあんが物語を進めるに従って、静かに耳を欻<sup>(71)</sup>てている。ペーターは興味津津<sup>(72)</sup>となった。とつあんの嘶が済むまで彼の注意を惹いていたのはただ好奇心に過ぎなかったが、同席のブラースが、宝を掘り出すにはどうしたって必要な品である。開錠<sup>(73)</sup>根を熊啄木鳥からうまませしめる方法論を持ち出すと、ペーターの空想はいっぺんに燃え上がり、想像の中でもう身も心もプロッケン山の銅製の櫃の前に立ち、金貨をざくざくと袋に詰めていた。彼は今や不機嫌に絵描きのけちくさい申し出を投げ捨てた。彼の物欲はもつと旨そうな餌で活気付いたのである。二十枚の金貨なんて、仮にそれが自分の足元に転がっていたって、拾おうと腰を屈めるだ



けの値打ちはほとんど無い、と思ったことだろう。ハルツのポトシと葡萄酒の霧もやで意気軒昂げんきげんになったので、プロツケン山地で運試しをしよう、と即座に決心。重たい土鍋が精神化され、可燃性のガスで膨れ上がり、高く風の中を飛翔、この尋常ならざる元素「風」を愉快に楽しみ、そこに空中楼阁を築こうとする気球①に変じたのにさも似たり。

全ての悪の根源である金銭欲、物欲は元来親方の欠点では無かった。安楽に暮らしている間、金は右から左と彼の手を通過。のちには、窮乏に平然と耐えるのが彼にはますます辛くなったが。だから彼が黄金の山を望んだ、あるいは夢想したのは、嬬かあ大明神に押しつけられた驢馬代行職を礼儀正しくご辞退申し上げ、水車小屋へもはや袋を担いで行かずに済み、愛らしい乙女である娘にたっぷり持参金を付けてやる、ただもうそれだけのためだった。チェレミス族②流に娘と引き換えに代価を受け取り、一番高値を付けた男に売り払うよう説得された時があつたにしても、それは単に魔が差したに過ぎない。たびたび褒めものなる亭主の安楽椅子から立ち上がる前に、ハルツへの旅の計画は路銀な

どといった細かいことを含めて立てられておられ、これを実行するのは次の日曜日と日取りも決まった。

ペーター親方は心も軽く浮き浮きと家路についた。まるで黄金羔亭シユフリンゲルツェルでコルクスの黄金の羊の裘かわころもを得たかのように。けれども帰る途中、困ったことにあの魔力を持つ開錠根シユフリンゲルツェルをまだ手にしていないのにふと気づき、こうした空想上の至福がかき乱された。同時に、そりゃ確かに鹿は聖エギディウス様の日に交尾期③に入るけれど、啄木鳥きつぎはま

だ巢籠<sup>ご</sup>もりはしないことを思い出し、さながら婚礼が行われている家で灯火がぱつと消され、饗宴がお開きになったみたいに、突然また気持ちが悪く暗くなった。すっかり意気消沈して自室に忍び入り、固い藁蒲団にどざりと身を投げたものの、まんじりともできぬまま。その時、内なる声がこんな諺を囁いたような気がした。いわく、延期は中止にあらず、と。彼は急いで灯りをとると、羽根ペンを一本尖らせ、宝を掘り出すやりかたを残らず、一項目たりとも記憶から消えぬよう、最初から最後まで正確に紙に書きつけた。すらすらと書きあがって、一切が目の当たりにあるかのように記し終わると、彼は己<sup>おの</sup>が苦しみというかさかさのパンの耳をまたしても甘美な希望という蜜の壺に浸し、それで心を慰めた。もう一冬驢馬の苦行をしなければならぬとしても、人生行路を哀れ悲しき水車小屋との往復でおしまいにはしないで、と考えて。

朝が暗い夜を追い払うと、びんしゃんしている主婦はもう活動を開始、家事を検閲しながら甲高い声でいつもの朝の唄を歌っていた。そして働きのルツィーネの可愛らしい指は、くだんの熱心な物書き氏が羽根ペンを措<sup>お</sup>く前に、ぴかぴか光る針にもう何度も絹の糸を通したものの。せわしない女房殿は慌ただしく部屋の扉を引き開け、いとしい背の君が仕事の真つ最中なのを発見。「この飲んだくれ」というのが彼女の朝の挨拶だった。「あんたって人は結構な長い夜を酒盛りして過ごし、あたしの遣り繰りから盗んだおあしを無駄遣いしちまったんだね。あんたなんぞ救貧院へ行くがいいのさ、この大酒飲みが」。こうした真心籠もった表敬にとつくの昔に慣れきっているペーター親方は一向うろたえず、嵐が収まるまで待ち、泰然自若としてこう言った。「いとしいおまえ、腹を立てなさんな。わしはうまい仕事を考えてる。どうやら役に立ちそうなのをな」。「こののらくら者」と彼女はせせら囁<sup>ささ</sup>う。うまい仕事だつていいのだ。どんなあんばいに、またいつになるやら分からんが、最期<sup>さいご</sup>がやって来ても、わしの家事の始末が万端ついで



るようにな」。全く思いも掛けないこの言葉は無邪気なルツイーネの胸に深く突き刺さり、朝のように朗らかだったその碧い目から優しい涙がどっと溢れ出し、口からは高い悲嘆の声が拳がった。彼女は、間もなく身罷ることを告げる厭な虫の知らせがパパにあったのだわ、と考え、昨晚新しいお墓の夢を見たことが念頭に浮かんだ。かてて加えて、酒を飲んだ翌日、死、埋葬、復活、審判の四終ししゅうに思いを致すなんて、

全く父親の平素の習慣とは違っている。これに反しイルゼ母さんには虫の知らせなんぞ屁でもない。彼女の磐石ばんじやくのごとき心は、まめやかな連れ合いがもしかすると死ぬかも知れない、と思ひ描いたところで、些かも優しい愛情に突き動かされたりはせぬ。どうやらあちらは、遺言書を残す、なんていう狡い口実でそいつを呼び起こそうと思つたらしいが、それどころか始めた序曲と全く同様の荒唐しい不協和音にその音楽の主題を移した。「この食いしん坊」と彼女。「あなたは財産を遣い尽くちゃったじゃないか。それなのに遺言状を作るつもりだつて。一体全体どんな遺産があるつてのよ」。夫「わしの体、わしの魂、わしの女房、わしの娘さ」。妻「ああ、あたしゃこのことについても訊いておかなきゃなんない。あなた、だれに相続させんのさ」。夫「天と大地、聖母マリア修道院、それから地獄さ。このどれにも遺贈分がある」。妻「で、何を遺贈するつてのさ」。夫「わしの体は大地に、わしの魂は天に、わしの女房は地獄に、わしの子は修道院に」。返答の代わりに猛妻は山猫のように亭主の頸つ玉に飛び掛かり、この齒に衣着きぬせぬ遺言者の縮れ髻をかき筆むしり、目の玉を抉えぐり出そうと強く髻にしがみついたが、しかしながらこの慈しみ深い意図は、彼女の骨ばった顔に炸裂してその人相を変えた夫の強力な握り拳に幸いにも妨げられた。かくして夫婦間の確執



は即座にけり。この家庭的な城内平和破棄は、そのそもその原因から見て、それ以上咎め立てされる性質のものでは無かつたし、争いを好まないルツイーネの執り成しがあつて、間もなく和解に持ち込まれた。ペーター親方はまたしても水車小屋へてくて歩いて行き、何もかも以前と同じまになつた。

親方はこれでもう五十回というもの春に、鵲ウツクや燕ツバメが戻つて来るのを見たけれども、これまではついぞそれに注意を払わずじまい。それから緑の木曜日グリュン・ドナースタグには和蘭芥子他八種の香草を調理してお顧客トクイさんたちに初物野菜として供したものだ、自分では賞味しなかつた。けれども儉しいおかみさんが次の年の芳春に初めて食膳に出したるくに脂肪も入っていない甘藍料理キャベツを、彼は聖マルティヌス祭の鶯鳥ウとどつて取り替えなかつたことだらう。そして初燕の姿を見掛けると、この鳥が無事に戻つて来たことを黄金羔亭の一シヨッペンシヨッペンの葡萄酒で祝つた。その上、熊啄木鳥の巢を捜し当ててもらふ情報提供者らワを雇うため、娘の勤勉な手が渡してくれる内緒の小遣いを全部貯めた。この仕事に選んだのは横丁をぶらぶらしている幾人かの腕白小僧たち。そしてこの連中を森や野原に送り出した。しかし我侷ワ気侷ワながきどもは親方を嘔い者にして、四月馬鹿をやらかし、遠く何哩も山や谷を引き回し、その場で彼が見つけるのは鴉の雛とか木の空洞うらにいる一腹の仔栗鼠りすたちだつた。それで気を悪くする彼を

こいつらは嘲り笑つて、一目散に逃げ出した。けれど彼の情報提供者のうち悪戯者でない一人が、ある時タウパー川のほとりの草原で枯死しかけた榛はえの木きに営巢えいさうしている一羽の熊啄木鳥がいるのを嗅ぎ付け、息せき切つて見つけた物をご注進。知識の無い自然研究者は、この一件を検分するため急いで町の外に出た。情報提供者にその樹のところに連れて行かれた彼は、一羽の鳥があたりを飛び廻つていて、そこに巢を作っているらしいことは見届けた。しかし啄木鳥というのは、台



所王朝が征服した鳥類には入っていない。雀や燕のように群をなしてもおらず、鴉やその仲間のこくまる鴉のように頻繁に姿が見られるわけでもない。そこで彼は情報提供者の報告がはたして正しいのかどうかも疑った。だって親方は、熊啄木鳥なんてかの不死鳥同様、お目に掛かったことは無かつたんだもの。幸いそこへ獵師が一人通り掛かり、疑念をすっぱり氷解させ、訊き手の望み通りの判定を下してくれ、更にまた頼まれもしないのにこの鳥に関する博物学全般を講じた。ただしこの男は熊啄木鳥の最も卓越した特性については通じていないようだった。

秘密主義の計画立案者はこの発見に心勇み、連日樹を巡回、彼のいわゆる遺言状を祈禱書のように読んだもの。もくろみを実行するのに適切な時期になったと思われるのと、赤い外套を手に入れようと捜した。けれども町中にもはやたった一着の見本しかなく、それは頼みごとをするのがどうにも憚られるある男の衣装戸棚に蔵しまわれていた。つまり外套の持ち主はヘンマリーング親方、言い換えれば死刑執行人シカルフリヒターだったのである。堅気の帝国市民がその評判をこうしたきわどい賭けに擲なげつ決意を固めるまで大層な克己を必要とした。もし事の次第が漏れようものなら、黄金羔亭のこれまで飲み友達にはもはやだれも彼に返杯してくれまいおという危険をその際冒したのである。さはさりながらペーターは、酸っぱい林檎りんごにかぶりつかなきやならないのは分かっていた。彼が赤外套氏に頼みごとを持ち出すと、こちらはれっきとした御仁が自分の職務服を使わせて欲しい、と申し出たことをなんとはなしに名譽に思つて、快く願いを叶えてやった。この必要な装備が調ととのうと、開錠シユプリング・ウルツェル根捜しは教えられた通り極めて几帳面に手順を踏み始めた。巢に栓をすると、同席のブラスが述べたように何もかもうまく行つた。啄木鳥が開錠シユプリング・ウルツェル根を嘴にくわえ



て飛んで来ると、ペーター親方は素早く樹の陰から姿を現わし、巧妙機敏に事を運んだので、鳥は火のように赤い外套を目にするとびつくり仰天して開錠根を添え物「糞」ともども落つことし、ためにこの好人物、トビアスとつあんの<sup>(86)</sup>ように視力を失いかねないとこらだつた。狩猟術は無事に成功、あらゆる閉ざされた扉を開く万能合鍵である魔力を持つ開錠根が手に入ったので、持ち主は筆舌に尽くし難い歓喜に酔い痴れた。彼はこれを黒梅擬の束の中にしまい込むのも忘れず、もう宝物を掘り出したかのように満足して家路を辿つた。

当然ながらこうなると故郷の町にこれ以上留まっていることはない。彼の頭にあるのはただもうプロツケン山のことだけ。そこでひそかに陣営を撤収するため迅速に準備をした。彼の旅行用具は僅かなもので、もつぱらがつちりと丈夫な旅の杖と厚い布地の旅囊<sup>リュツェ</sup>くらい。旅囊を調達するには何か別の口実を使つたが、気の良いルツイーネが貯金箱の中身をいそいそと用立ててくれた。幸い、家を抜け出すことに決めた日に、母娘<sup>ハル</sup>はある尼僧の着衣式<sup>(87)</sup>があるので、聖ウルズラ修道女会<sup>(88)</sup>に出掛けることになつていた。ペーター父さんはこの好機を捉え、歩哨の目をかすめて脱営しようとしたわけ。なにしろ女性居住者の不在中留守番を命じられたんでね。

さて、これからまさに家の守護神を祝福しようとした時、開錠根のかねて評判の効き目を目の当たり実証するため、これを使って幾つか予行演習をしておいてもまんざら悪くはあるまい、と彼はふと思いついた。イルゼ母さんは自室の壁に埋め込んだ小さい戸棚を持っていて、家政上手の利口な主婦のこと、この中に七つの錠を下ろして万一の用意の臍<sup>ヘス</sup>練りを一人娘の名親のくれた祝い金<sup>(89)</sup>と一緒に保管、その鍵は護符のようにいつも肌身離さず持ち歩いていた。この家の財政合議体において出席権も発言権も無かつたペーター父さんは、こうした家ノ秘事<sup>アルカナ・ミステリア</sup>を全く知らなかつた。ただ何となくここに大事な物が隠されてるんじゃないかな、と予感がしただけ。なにしろこの戸棚が目に入るたび、心臓が占<sup>ヴンシエル</sup>い棒<sup>ミルター</sup>みたいにとどきどきしたからで。彼はこのときめきを、黄金か金目の物が近くにある徴だ、

と思つたもの。さて、彼の占ウシシエルケルい棒ツルツエル的感覚が当てになるかならないかを知る実験である。至極慎重に開錠シユプリング・ツルツエル根ツルツエルを取り出した彼は、それで戸棚の扉に触れた。するとびっくりしたことに七つの錠はたちどころにがちがちと外れ、扉はぎしぎし音を立てて開いた。そして儉しい主婦の財産が、氣立ての優しいルツイーネの名親の祝い金とともに彼の目にきらめいた。魔力を持つ開錠シユプリング・ツルツエル根ツルツエルの効能の方を喜ぶべきか、見つかった宝物の方を喜ぶべきか分からぬまま、ペーターは物が言えないでくのほうよろしく茫然と佇ただすんでいたが、とうとう自分の宝探しの使命と前途に控えた旅路を思い出し、見つけた物を路銀として着服することにした。戸棚を綺麗さっぱり空っぽにしてから彼は、リユーネブルクの黄金の銘板を盗んだニコール・リスト(83)よろしく、錠を全部大いに入念に掛け、それからきちんと戸締りした玄関をあとに、心浮き浮きとただちに目的地へと向かった次第。

いとも熱心に修道院の壮麗な儀式に参列した敬虔な女たちは、家に錠が掛けられていて、留守番が配置に付いていないのをなんと訝いぶかしみ、呼び鈴を鳴らし、扉を叩き、「ペーター父さん、開けて」と叫んだ。けれども中からは何の音沙汰もない。ただ人懐こい飼猫がにやおと応えるだけ。効き目のある開錠シユプリング・ツルツエル根ツルツエルの持ち合わせはないから、玄関を開けるために合鍵の束を携えた錠前師が呼び寄せられた。その間イルゼ母さんは力の籠もったお説教を起草していた。これには、彼女の考えによれば休息にいそしんでいる、のらくら男にくれてやろうと思つている善への戒告がたっぷり入つていた。すなわち「悪魔バベルのやつめ、眠りこけてるんだわ」と彼女は言つたものである。家中が屋根裏部屋から地下の穴蔵まで徹底的に探された。が、悪魔バベルは見つからなかった。あの化け物つたら、とおつかあ殿は考えた、きつとどつかの居酒屋で夜明けまで飲んだくれてるのかも知れない、と。この思いつきに出し抜けにぎくつとさせられて、彼女は腰に下げた囊ふくろを手で探り、鍵束に触つた。自分が例の護符に注意してなかつたものだから、宝が呑みべえの宿六にせしめられたかも、と疑いを抱いたからである。でも鍵束はすぐさま見つかり、戸棚はごく平穩無



事なただずまいで、何も変事が起こったとは思えなかつた。

昼となり、それから宵となり、とうとう真夜中になつたが、ペーター父さんは姿を現さなかつた。由しい事態になつたので、母と娘はこのおかしな失踪の原因と目的について真剣に相談した。いろいろ風変わりな推論が持ち出されたが、真夜中というぞくぞくする刻限には明るい陽気な着想より悲しく暗鬱な考えが組み合さり易いもの。イルゼ母さんも自分が夫にとつてほんとに悩みの種だということはよくよく心得ていたので、こうした良心の呵責がかつたと彼女の心を焙り、極めて真つ黒けな思いつきを幾つも生ませた。「ああ」と手を揉みしほりながら叫んで「神様どうぞ慈悲を。ルツイーネや、お前の父さんは何か悪いことをやらかしたんじゃないか、つて気がするよ」。こうした恐ろしい考えはまだ慎重なルツイーネの念頭に浮かんでいなかったが、これを聞くと仰天して震え上がり、一声甲高い悲鳴を上げると、五感が朦朧とし、気を失つてくずおれてしまった。おっかさんは決然としてすぐさま燃える

硫黄糸(5)を使って娘の消え失せた動物生気を再び蘇らせた。しかし意識を取り戻した乙女は悲鳴を上げて想像上の不幸を嘆き悲しみ、夜が明けるまで啜り泣き、かきくどいた。

家の隅隅までもう一度徹底的に調べられ、壁の掛け鉤かぎの一本一本、梁はりの一本一本が検分された。けれどもペーター親方はどこにも見当たらなかつた。ありがたいことにね。つまりそれで分かつたのは、親方が頸を吊つたんでも括くくつたんでもない、ということだから。それから引つ掛け棹を携えた人人が町の外に送り出され、タウバー川に沿つてあらゆる深処ふかみと淵を搜索しな

ければならなかった。しかしこうした骨折りも成果無し。イルゼ母さんは気分転換の早い性質（たち）、一時はくらくらつとしたけれど、すぐまたこれは収まった。それゆえ連れ合いが消息を絶つたことについては簡単に諦め、彼が体と魂ともどもこの世からこっそりおさらばして、その屍（しかばね）をヘンマーリング親方の手下によって埋葬（96）されるという恥辱を省いてくれたことに満足した。さて彼女は亭主がいなくなったため家政上穴の空いた職務分担を丈夫な驢馬で補填しようとして真剣に思索、うまい品選びをして、その駄獣の持ち主と値段について折り合い、次の日その男に家へ来てもらい、いとしい伴侶の跡継ぎの代価をしかるべく払おうとした。寢床から起き上がってすぐ頭に浮かんだのは購入金額の決濟。この目的のため大事な資金からながし融資してもらおう、と壁の戸棚の七つの錠を外した。どの引き出しもすっからかんであることを発見した時、イルゼの気持ちはいかばかりだったことか。暫く口も利けずに茫然と佇んでいたが、間もなくぱつと閃くものがあつた。そこで彼女はとんずらした身内の泥棒に対しなんともすさまじい怒りに駆られたので、枢機（すうききょう）卿が赦免を手えられた、と耳にしたラ・モット夫人のように物凄い憤激のあまり室内用便器（おま）を額に叩きつけて真つ二つに割り、その破片で肌を傷つけた（98）。そうしながら声を上げて身の毛もよだつようなひどい呪詛を並べ立てたので、綺麗なルツィーネは肝を潰してそばへ飛んで来て、どんな災厄が起こったのか目の当たりにした。さて母親が彼女にどんな発見をしたか一部始終を告げ、同時に名親の祝い金も消え失せていることをあからさまにすると、氣立ての優しい娘はそれが失くなったのを悲しがるより喜んだ。これで愛するパパが何か悪いことをしてかしたのでなくて、どこか他の土地で運試しをしようと思間に出て行ったことをはつきり確信したからである。

この家庭悲劇の約一箇月後、だれか戸口で呼び鈴を鳴らす者があつた。粉商（あきな）売のお客と思つてイルゼ母さんが開けに出ると、入つて来たのは立派な若者、気持ちの好い風采で、郷士（ユンカー）のような良いみなりをしている。イルゼ母さんに鄭重なお辞儀をすると、彼女の息災を祝い、美しいルツィーネの安否を訊ね、全く知り合いであるかのようにふるま

った。イルゼはこれまでこの人を見掛けたことがあるとは思えなかったのだが。娘のことを訊かれたので、この訪問は本来自分を目指したのではない、と母親はすぐに気づいたものの、それでもこの見知らぬ人を部屋に入れ、床几を勧め、ご用件は、と質した。余所者はいわくありげな顔つきをして、腕の良い裁縫師さんにお目に掛かりたい、と言うのだった。大層評判がおよろしいお嬢様に、ぼくはある注文をいたしたいものですから、と。イルゼ母さんは、この町の者じゃない通りすがりの若いのが可愛い女の子にどんな注文をするのやら、と心中考えたものの、ルツィーネがいけないと事が何も運ばない風向きなので、別に文句はつけず、仕事に励んでいる娘を呼んだ。こちらは母親の言いつけに応じ、刺繍枠を置いて、下へ降りて来た。淑やかなルツィーネは知らない男の人を目にしたので、顔を赤らめ、恥じらって目を伏せた。青年は親しげにその手を握り、乙女がそれを引つ込めると、真心籠めた優しさで彼女を見つめ、ルツィーネはこれに更にまた当惑させられたのだが、お話がある、と言うのだった。ルツィーネはその声で相手がだれだか分かったらしく、こう口を切って沈黙を破った。「ああ、フリードリン、あなた、どこからここへいらしたの。私、あなたは私から百哩も離れたところにいるとばかり思ってたのよ。あなた、私の気持ちを知ってらっしゃるくせに、またしても私を苦しめにおいでになったの。「いいや、そうじゃない、可愛いひと」と彼は答えた。「ぼくが来たのは君とぼくの幸せを成就するためさ。ぼくの運勢は変わったんだ。ぼくはもう前みたいな貧乏人じゃない。金持ちの従兄が没くなってね、ぼくが遺産相続人になった。だからお金も土地もたっぷりある。今ぼくは憚ることなく君の母さんの前に出られるんだ。ぼくが君を愛してることは自分にゃよく分かる。君もぼくを愛してくれてりゃいい、とぼくは思う。君を愛してるっていうのは本当だ。だからぼく、君に求婚しに来たんだ。君が本当にぼくを愛してるなら、ぼくと結婚しておくれ」。

綺麗なルツィーネの碧い目はこう語られている間に晴れ晴れと輝き、最後の言葉を聴くとその小さな口は和やかな



微笑みにほころんだ。そして彼女は、なんとも訝しく物思いに耽っている風情の母親の気持ちを探るかのようになり、こっそりそちらを盗み見した。イルゼ母さんは、身持ちの固い娘が自分に気づかずにどうして男と情を交わすことができたんだろ、と何がなにやらさっぱり分からぬ。ルツイーネは母親と連れ立ってでなければ決して外出しなかったし、父親を別としたら家の中に男性の姿が見られたことはこれまで一度も。イルゼ母さんは以前なら、だれか乙女漁りをする奴がうちの娘の心にこっそり忍び込むなんてことをしでかすには、扁豆ひらまめを針のめどを通して投げるより巧くやっつてのけなければならぬよ、と十字を

切って誓いを立てたことだろうが。けれども狡猾なフリードリッヒが母親の哨戒線にそっと忍び寄り、無邪気な乙女心に愛を植え付けたのは事実が証明している。こうした経験から大いに教えられることは、美しい娘の心は、母親の保護監視下にあっても、七つの錠を下ろした臍線り金同様、盗難から安全に守られてなんぞいやあしないんだ、ってこと。

イルゼ母さんがこの秘めたる情事に関する辛辣な寸評にまだけりを付けないでいるうちに、機敏な求婚者は、机一杯に金貨を並べるといふ非常に効力のあるやりかたで彼の切願を認知させた。金貨の輝きは黒い粘板岩の机の上でなんともしらきらと母親の目にきらめき入ったので、彼女は隠されていた恋愛に片目を瞑つむってやらざる「大目に見ざる」を得なかった。どっちみち、それはごくごく慎重深く真面目に行われたのだろう、と推測されたし。狡いルツイーネはこれまでもずっと、厳格な家の女主人あるじが強力な悪魔祓いを始めて、誠実な恋人を家から追い出すのではないか、

と心配していた。要するに彼女は、優しいプシユケが愛神アモールを愛したように、心底熱烈に青年を愛していた。なにしろこれは彼女の初恋だったんでね。でもこのたびはこうした心配は杞憂に終わった。がみがみ女は仔羊のように柔和なもの。妙齢の娘たちは長いこと店曝たなばちしにしないで、まずまずの売り値が付けばそれで手放さなくちゃいけない、その上概して最初の買い手が一番、との健全な主義を持っていたので。そこでイルゼ母さんはもうとつくに胸の内母親としての同意の言葉を用意していたのである。このお金持ちの求婚者が自分にそれを請い求めたら、すぐ用立てられるように。

お金を並べ終わるとすぐに彼は、じりじりと待ち受けている母親に向かってこの上もなく正式に口上を述べたが、返事は、ええ、ええ、けっこうですとも、の一点張り。縁組は、忠実な家畜である例の驢馬の売買契約より迅速に成立した。婚約者たるのが公然となると、青年は金貨の半分を帽子さくらに浚い込み、それを結納金として許嫁いひなげの前掛けにざらざらと注いだ。残り半分为彼は、それで婚禮の仕度を調べてもらうために、渴望している母親に早天かんてんの慈雨あまながら黄金を差し出した。それが済むと、内密の会見を恋人に所望したが、これは当然あつてしかるべき二人テ・ク・テトつきりの話としていやおうなく承認された。魅惑的なルツイーネは一時間後極めて朗らかな様子で再び姿を現し、誠実なフリードリンが自分の運勢の変化に関して少なからぬ疑惑の纏もつれを解きほぐしてくれたことに対して、その薔薇の唇で初めての柔らかな接吻をしてお礼にした。その間に忙しい母親は何はさておき先ずお宝を安全なところに移していた。地下の穴蔵の秘密の某所に埋める暇は無かったものだから、さしあたりあの当てにならない壁の戸棚にしまいこんだ。さてそれから家中を飾り付け、箒で掃き清めた。そして面倒見の好い近所の女性に頼んで美味しい料理と酒の用意もしてもらい、できたての娘婿のため空き部屋の一つに豪華な客用寝台をしつらえた。このお婿さん、イルゼ母さんの考えでは、いとしいひとにお休みを言つて、寝台にお引き取りになるまで、あんまり時間が掛かり過ぎた。

この余所の若者の氏素性、彼との馴れ初めはどんな具合に、恋人同士の内緒の交情の始まりは、それからそもいかなる謀りごとで自分の油断の無い監視の目が眩くらまされたのか、こうしたことが知りたくて堪らず、うずうずしている母親の動物生氣は異常な動きをして、眠気はいつかなその目に訪れなかった。いつもは、朝の時間は口の中の黄金きん「早起きは三文の得」、なんていう諺をたびたび引用してさっさと早寝してしまふのが常だったのに。真夜中の刻限とはあいなったが、寡黙なルツイーネにはまだ峻厳な審判が控えていたわけ。けれども彼女としては打ち明けるしかるべき理由が無かったか、話好きの気分はいとしい恋人と一緒に既にねんねしてしまつたか、のいづれかだった。イルゼ母さんがあからさまに訊問を開始すると、可愛い乙女は小さい口を丸く開けて欠伸あくびをし、両目をこすつて砂男サンドマンの到来を告げ、答弁をしようとせず、眠くつてしようがない、といった声音こゑでこう言つた。「母さん、何もかももうすぐ詳しくお知りになりますわ。でも今はもう私を休ませて頂戴。あの若いお方が朝ご自分のお買い物を見た時、私の頬ほっぺが蒼褪あおざめていないようにするには、それが必要なの」。ご婦人の好奇心はこの言い逃れで我慢せざるを得ず、いつもの習慣に反してとても遠慮深くなつていたので、秘密の覆いにそれ以上手を触れなかった。

さて家中でんやわんやの大騒さわぎが始まつた。華燭の典を挙げる準備が一心不乱に進められる。ルツイーネ結婚の噂はさながら燎原りやうげんの火のごとく町に広まり、その日の語り種くさとなつた。颯爽さつさうとした求婚者の姿が街頭に現れると、猫も杓子も窓辺に駆けつける。あるいはまた、角屋敷の傍らや十字路に立ち止まり、ぽかんと口を開けてその後ろ姿を見送る。そしてこのたびの求婚のことを話題にするのだった。健気けんげな乙女の幸せを祈る人たちもいれば、うまくやつたもんね、と嫉む連中も。フリードリンは全ローテンプルクを捜しても及ぶ者の無い男前の青年で、その上衣装も着こなしも見事だったが、それだけに町娘らはやつかんで、ああだ、こうだ、とけちを付ける。のっぽ過ぎるわ、と言う子もいれば、瘦せつぽちね、と片付けるのも。また、太つちよだ、とか、けばけばしい、とも。ある者は彼のこと





を、みせびらかし屋、と呼び、また、他の者は、軽薄男、と称し、喜びごとは長くは続きっこない、と言つてせめてもの慰めにし、フリードリンを、この国にちよいと巢作りに來ただけで、またどこかへ飛び去つてしまふ渡り鳥に譬えるのだつた。とは申すものの、近所界隈の誘屋そりや姑氏ねみも、この余所者の渡り鳥め、せつせと巢作り(註)に勵んでやがる、と白状せざるを得ない。ある日、ニユルンベルクの運送業者が重荷を積んだ貨物運搬馬車を家の前に乗りつけ、数数の櫃や箱を中に運び込んだ。イルゼ母さんは鑿のみと槌を振るつてすぐさまそれらを開けに掛かり、未來の娘婿の豊かな恵みにびっくり。そして婿殿に財産を遺してくれたという御仁を再三再四祝福したもの。

婚禮の日取りが定められ、町の半分がこれに招かれた。祝宴は黄金羔亭で行われることになった。なにせお客全部を容れる余地は家には無かつたので。花嫁御寮は婚禮の花冠を飾り付けると、母親に向かつてこう言つた。「もしペーター父様が私を教会に連れて行つてくれるのなら、この冠はご婚禮の日にはほんとにすてきになるんですけどね。ああ、父様が戻つて来てくれればなあ。私たちは神様の祝福をたっぷり戴いているのに、父様はひもじい思いをしてるんだわ」。こうした物思いがひどく心にのしかつたので、ルツイーネは啜り泣き、かきくどき始めた。これに釣られたせいも、それともまた改めて裕福になつたので昔の愛情が



母親の胸に再び息づき出して来たためか、花嫁の母も同意してこう言った。「父さんが戻って来てくれりゃ、あたしも満足なんだがね。だってお婚さんがあのひとを死ぬまで養ってくれるだろうから。父さんがいなくなつてからというもの、いつも何かが家に足りないような気がしてるんだよ」。この言葉も満更嘘では無かった。つまり、彼女の火打道具に燧石が失くなってしまったのである。以前はこの石から彼女の鋼鉄の気質が火花を発火、諍いの火口に火がついたわけ。ペーターが行方をくらましてこのかた、彼女にとって大いに遺憾なことに家内はいつも平穩無事。そこで彼女の胆嚢はしばしば苦い中身の液汁をぶちまけてくたて堪らなくなつた次第。

それからどうしたかつて。結婚式の前の晩のどんがらがらがつちやんの宵のこと、一人の男が手押し車を押して市の門を入り、検査の税関吏に一樽の板釘を見せてその関税を払い、積荷と一緒に婚禮のある家に真っ直ぐに向かい、扉をほとほと叩いたのさ。花嫁が鎧戸を押し開け、だれが来たんでしょ、と見るとね、ペーター父さんだつたんだ。家中大喜びとなり、嬉しくて嬉しくて堪らぬルツイーネは机と長腰掛を跳び越えてペーターに走り寄り、真っ先にその頸つ玉にしがみついた。それからイルゼ母さんが夫に手を差し出し、「この悪党、改心するがいい」とのたも。うて、彼女の大事な臍繰りに盗みを働いたことを許してやつた。最後に花婿のフリードリンも歓迎の仲間に入ると、母親と娘は一緒になつて、彼が求婚してくれた事の次第を逐一ペーターに縷縷説明した。ペーター父さんがこの赤の他人の

若者を厳しく見つめて、いろいろ文句を付けようとするように思えたので。ところが、この余所者がどうして家族の一員たる正当な権利を獲得したか、との報告を受けると、ペーターは未来の娘婚に充分満足し、もうとつくから知り合ひだったかのように、親しげにふるまった。イルゼ母さんは舞い戻った夫に軽い食事を出し終わると、相手の冒險話を是非とも聞きたくて、他の土地でどんなことがあったんだね、と熱心に詮索に掛かった。「神様がわしの生まれ故郷のこの町を祝福なさいますように」と宿六。「わしは国中歩き回り、いろんな仕事をやってみた。おしまいが鉄物商売かなものあきなひでな。けど、こりゃ儲かるよりも損する方が多かった。わしの財産は一切合財でこの板釘の小樽一つさね。わしやあ、これを結婚する若い者たちの家計の足しに進呈して、家具でも買ってもらおう、と思つとる」。さてまた燧石が手に入ったイルゼ母さんの滔滔とうとうたる弁舌は改めて非難と侮辱の明るい火花に燃え立ったので、とうとうフリードリッヒが仲裁に入つて、舅を例の相続財産で扶養し、きちんと処遇する、と約束するまで、聴衆にされた三つ葉の和蘭紫雲英クロウツア「三人組」の耳はお蔭でがんがん鳴り響いた。

氣立ての良いルツイーネは、新たな市参事会が開催される時の市参事会員のようになめかしこんだペーター父さんに、翌日教会へ連れて行つてもらおう、という念願が叶えられた。幸せな新郎新婦の婚礼は大層にぎにぎしく行われた。それから間もなく若い人たちは自分自身の所帯を持ち、フリードリッヒはローテンブルクの市民権を獲得、市の立つ広場マルクトプラッツに面した薬局の隣の新居に引越した。その上葡萄酒と庭園、牧場と養魚池に添えて耕地も購入、裕福な男として市民生活を営んだ。一方ペーター父さんはのんびりと隠遁。金持ちの婚殿の恩恵で暮らしているんだ、と町中が考えたもの。そして彼の釘の蓄えこそ本當の豊饒コルネ、コルネの角なのであつて、これから有り余る富の香油が滴り落ちているのでは、と推測する者は皆無なだつた。

ペーターはだれにもそれと悟られずにブロッケン山への遍歴の旅を無事に済ませたのだつた。なるほど、聖ヴァル

ブルギスの祝日の前夜<sup>(10)</sup>、箒<sup>(11)</sup>という駆<sup>(12)</sup>馬車に乗ったご立派な魔女<sup>(13)</sup>同業組合の面<sup>(14)</sup>面<sup>(15)</sup>のようにせわしなくではなく、もつとゆつくり、快適にだつたが、フィヒテルベルク<sup>(16)</sup>からプロッケン山<sup>(17)</sup>までずらりと並んでいる旅籠屋<sup>(18)</sup>のどれにも立ち寄つて、穴蔵の葡萄酒の検閱を執り行つたから、フランケン<sup>(19)</sup>の国境を越えてのこの遠出では地面の上よりも下に立る方が多かつた。そして遙か彼方にハルツ山地を遠望するまでは、あんまり素面<sup>(20)</sup>とは申せぬ状態<sup>(21)</sup>で白日<sup>(22)</sup>の下<sup>(23)</sup>にまかり出たというありさま。が、これからは精神の全ての能力を思い通り、何の掣肘<sup>(24)</sup>も受けずに發揮<sup>(25)</sup>する必要がある面倒事が色々控えているのを弁<sup>(26)</sup>えていたから、彼は食べるにも飲むにも厳<sup>(27)</sup>しい禁欲<sup>(28)</sup>を己<sup>(29)</sup>に課<sup>(30)</sup>した。

プロッケン山にまだ到着しないうちは、彼の鼻が旅行用羅針儀として役立つてくれた。つまり鼻の向いている方へ忠実に進めば良かつたのである。ところが着いてみると、いわば磁針<sup>(31)</sup>がもはや方向を示してくれない地点である磁極に立っているようなあんばい。プロッケン山をあちこち行つたり来たり歩き回つたが、朝<sup>(32)</sup>飯<sup>(33)</sup>谷<sup>(34)</sup>がどこだか教えてくれる人間は一人もいなかった。それでも偶然正しい手掛かりを掴んで、アンドレアスベルク<sup>(35)</sup>が見つかり、エーダーと呼ばれるせせらぎを嗅ぎつけ、そこから新鮮な水を掬<sup>(36)</sup>い、詩神<sup>(37)</sup>の泉<sup>(38)</sup>から靈感<sup>(39)</sup>を受ける清涼な水を飲んだ文人たちよりもつと英気<sup>(40)</sup>滌刺<sup>(41)</sup>となつた。溝を発見すると、黄金羔亭<sup>(42)</sup>の主人が持ち出した議論の問題点をうまく解決。彼は本<sup>(43)</sup>当<sup>(44)</sup>に山の中に潜り込み、開<sup>(45)</sup>錠<sup>(46)</sup>根<sup>(47)</sup>は立派に役立つたのである。宝が見つかる<sup>(48)</sup>と、担<sup>(49)</sup>げるだけたくさん<sup>(50)</sup>の黄金を旅囊<sup>(51)</sup>に詰め込んだ。その額は自分の生涯の入費を賄い、器量<sup>(52)</sup>好<sup>(53)</sup>しのルツイーネ<sup>(54)</sup>の嫁入り仕度を調えるのに充分、とペーターには思われた。さて今や彼が明るい所に出そうと骨折<sup>(55)</sup>っている黄金の重荷は、以前のあの粉の袋のようにみりみりと肩に食い込んだ。それでも彼にとつて七十二段の石の階段を上がる道程は、水車小屋への道の辛さ苦しさ<sup>(56)</sup>に較べたらまだまだなんだという<sup>(57)</sup>ことも無かつた。これで彼は、その一味<sup>(58)</sup>徒党<sup>(59)</sup>とともにリヨンの両替商<sup>(60)</sup>フィンガラン<sup>(61)</sup>に悪名<sup>(62)</sup>高い大窃盗<sup>(63)</sup>を行つたアントアーヌ・テヴネ<sup>(64)</sup>みたいな金持ちになつたのだもの。

帰途再び日の光を目にした彼は、長いこと激浪の中で死の恐怖と闘った挙句助かって、足の下に堅固な大地を踏み締め、海岸に喜び勇んで這い上がった難船者のような気がした。危ないことは無い、と約束されていたものの、大地の下で探索行をする間、山の精を絶対的に信頼していたわけではなく、恐ろしい宝の守護者が荒くれた男の姿を取って出現、自分を死ぬほど怖がらせるか、あるいは豊かな獲物を再び取り上げるのではないかと心配だったのである。石段を下っている時、ぶつぶつと鳥膚が立ち、髪の毛はことごとく逆立った。財宝のある穴蔵を眺めることなんかにはろくさま関心は無かったので、壁や柱が黄金や宝石で素晴らしく光り輝いていたかどうか、後になって思い出すことさえできなかつた。彼の念頭にあつたのは例の銅の長櫃のことだけ。この中から彼はできるだけ素早くたつぷり袋に詰め込んだ。さしあたり何もかも望み通り進行。山の精は声も聞こえず、姿も見えない。ただ、彼が穴蔵から足を踏み出すとすぐさま、鉄の扉は轟然たる大音響とともに再び閉じた。びくびくものの宝物探しは気が急いでいたので、黄金を掴み入れる際手から離れた大事な開錠根シユプリング・ワッペルを一緒に持ち出すのを忘れてしまった。そのため二度目の運送は不可能とあいなつたが、しかしながら持ち出せるだけ多くの純金の財産を手に入れたペーターはご満悦で——彼は力の強い担ぎ手だったことは我我先刻承知だよね——このことはさして気にも留めなかつた。

何もかもマルティンとつづあんが教えてくれた通りにうまくやつてのけ、見せ掛けの溝をもう一度土で埋め戻してから彼は、掘り出した財宝をどうすれば安全に守れるか、それから、生まれ育つた町でさして人の目を引かず口の端はにも上らずに、これを遣つて心行くまで暮らせるようにするにはどうしたら良いか、とつくり思案に耽つた。家にいる悪妻に昔のハルツの王様の宝を受け継いだことをこれっぽっちも嗅ぎつかせたくない、というのも甚だ重要だつた。だって、もしそんなことになつたら、身上しんしやうを一切合財引き渡すまで、結婚生活という拷問台で彼女から責め苦を受けるだろうから。ペーターの考えとしては、なるほど彼女にもその分け前を与え、このありがたいせせらぎで咽喉の



急ぐ旅では無かったから、どこの居酒屋にも立ち寄り、亭主の持つている飛切りを出させたもの。

例の金庫から失敬した路銀を使つて山を下り、有名な小さな町エルリヒ<sup>(15)</sup>——当時はアマラントとナントヒエン<sup>(16)</sup>はまだここに住んでいなかったけれど——へやつて来た彼は一人の若者と道連れになった。この若者、気持ちの好い風采なのだが、顔には深い苦悩が刻まれている。ペーター父さんは親切で気さくな性分、それに丁度おしゃべりをしたい機嫌だったので、こう話し掛けた。「お若いの、どこへおいでかね」。相手はとても憂鬱そうにこう返辞した。「広い世間ですよ、おとつつあん、それともこの世間からどこかほくの足が運んでくれるところへ、と言つた方がいかな」。『どうしてまたこの世間からなんだね』とペーター親方。「世間があんたに何かしてかしたのかね」。旅人。「いや、何にもしたわけじゃありません。ほくも世間に何かしたんじゃない。それでもほくはもうこれ以上この世間にはいたくない」。陽気な手車押しは、自分が愉快な時はいつも、周りの人間が皆明るく朗らかでいるのが見たかったか

渴きを潤わせるのはよいが、その源泉は探り出させたくない、というわけ。最初の方は簡単に解決が付いたが、後の方はなんとも頭痛の種。親方には一向けりが付かぬ。財宝をすっかり詰め込み、固く袋の紐を結んで、行き当たりばつたりの最寄りの村まで担いで行くと、車大工のところの手押し車を一台買い、樽屋で上底下底のある樽を一つ作つてもらい、それを近くの鍛鉄工場まで運び、上と下に板釘を詰め、真ん中にまことに巧妙に宝を隠した。こうした貨物を積んで彼はし済ましたりとばかり家路に就いたが、なにせ皆目



ら、このがっかりしている青年を元気づけようと全力を尽くした。が、いくら説きつけても一向うまく行かなかったので、陰気な気分が横隔膜の下の食道辺りに座り込んでいるんだろう、と推測。それゆえ旅籠屋の夕食に招待して、これはこちらの奢りだよ、と約束。陰隠滅滅たる道連れはこれを拒まなかった。同じ夕べ、そこで費用持ち寄りの楽しい宴会が開かれていた。戯れや冗談が盛んに飛び交う。ペーター親方は大いに我が意を得たりで、極めて上機嫌になったから、費用自分持ちで大一座全員に酒をふるまった。おしゃべり、ばか囃、性格点描<sup>⑩</sup>、あの本になったのみに何もかもごったませ。酒場じゃこれがまたすてきにおもしろい。例の塞ぎこみ屋さんだけがこれを好まず、隅っこに座って、ぼんやり下を見つめ、やつとこさ三口ほどしか食わず、飲びの酒盃もちよっぴり唇でお毒見しただけ。ペーター親方は、こうしたやりかたでも憂鬱症の客人に手の打ちようが無い、と見て取ったので、相手の苦悩は胸に深く根を張っているに違いない、と考え、一部屋に上等な寝床を用意させ、客人に本音を吐かせるのは翌日にしよう、と企てた。なにしろ、何か変わった物語があるらしい、と思

い、それを聴き出したくて堪らなくなったものだから。晴れやかな夏の朝が彼を旅籠屋の庭の園亭<sup>あずまや</sup>へと誘ったので、朝食をそこへ運ばせ、塞ぎの虫君が目覚ますと、外へ出ておいで、と声を掛け、園亭の中でその傍らに座り、励ましてこう言った。「おい、楽しいお仲間よ、憂さをさっぱりさせて、陽気になんな。なあ、ほら、しよぼくれた夜が過ぎたら好いお天気の日になりそうじゃないか。あんだ、何をくよくよ

悩んでる。言ってごらん。「どうしようもありませんよ、おとつあんとひどく意気消沈して若者が答えた。「ほか胸の裡うちを打ち明けようとしたところで、あなたにやほくに助言することも、ほくを慰めることもできない。「案外なあ」とペーター親方が返して「わしがあんたを助けてやれるかも知れん。慰めは思いも掛けないところから来ることがよくある、<sup>(18)</sup>って教会の衆が歌うでないか」。彼がこうしつこい善意を發揮して愁い顔の騎士(19)に迫ったので、こちらはとうとうその意に添わざるを得なくなつた。「ほくの苦しみの原因は」と話し出す。「心を責め苛む悪事なんかじやなくて、不幸に終わつた純愛なんです。ですから、ほくの心懸かりをあえてあなたに洩らすわけには行かないんです。ほくはフランケン国のエッティンゲン伯爵(20)様の弩(21)射手で、生まれながらのご家来なんです。あちらのお家でほくは子どものように可愛がられました。伯爵様はほくを養育してくださいました。ですから、人人は、ほくが伯爵様の息子だ、なんて陰でひそひそ囁いたものです。四旬節(22)の半ばあたり一人の絵描きがいろんな絵をご主人のもとに売りに来ました。新しいお城を飾ろうと、かねてご注文になられていたものです。これらの絵画の中にある素晴らしく美しい乙女の肖像画がありました。皆はある女神の名を挙げました。そしてその絵師が言い張るには、ある綺麗な少女の愛らしい姿を写し取つたのだが、その娘は美しさに掛けてその模写を遥かに凌駕している、でも、あまりに恥ずかしがりだったので、画家の前には座らなかつた、とのこと。ほくはその肖像を眺めて決して飽きることはありませんでした。一日に十回もそれが置かれている広間に駆け込み、何時間も口を開けて見とれたものです。そして眺めれば眺めるほど、ほくの胸は燃え立ち、もはや安息を見出すことはできなくなりました。ある日ほくは絵描きを脇へ連れて行って、彼が食堂の肖像画を模写する題材にした、このたおやかな娘にはどこに行けば逢えるのか、是非とも教えて欲しい、と懇願し、もし包まず打ち明けてくれるなら、うんとお礼をはずもう、と申しました。絵師はほくの悩みの訳を知って、ほくの夢をげらげら笑い、ごまかすことなく、ほくが知りたくてならないことを話してくれまし



た。この綺麗な少女は、と彼は申しました。帝国直属都市タウバー河畔のローテンブルクに住んでいて、昔調理主任ガールコッホだった人の娘だ、君は運試しをしてみることができる、しかし、彼女はとても誇り高い、内気な性格なのだ、と。ぼくはすぐさま伯爵様に、お暇いとま乞いを、と願いました。ご主人はそれを許してくださいさらず、辞めさせてやるう、とおっしゃいませんでした。そこで、ぼくは夜出奔し、ローテンブルクへ向かい、間もなくその娘を探し出しました。でも、彼女の姿を見よう、あるいは、うまく逢おう、とぼくがどんなに骨折っても無駄でした。彼女は山猫みたいな目をした母親の雌の龍の監視の下で暮らしているんです。この母親は娘を家の外に出しませんし、窓から外を覗かせたりしません。家には女子寄宿学校のように錠を下ろし、男なんて一人も中に入れてません。

これがとつても辛くて悲しくて堪らず、ぼくは一つの計略を思いつきました。女の衣装を身に付け、顔を頭巾の下に隠し、扉の呼び鈴を鳴らしたんです。扉が開かれて、ぼくは愛らしい娘さんを目にしました。見惚れてぼくはうつとりしてしまい、危うく我を忘れるところでしたが、すぐに正気を取り戻し、刺繍の入った食卓掛けをあの一とに注文しました。彼女は国中で他に類の無い腕の巧みな裁縫師ですのね。さてそれからというもの、ぼくは自由にこの家に入りました。お仕事が捗はかどってるかどうか拝見に参りましたの、と口実を使って。そしてぼくの可愛いひとを目の前に置き、彼女と親しくおしゃべりをするという歓喜を味わったんです。何時間もね。すぐにぼくは気づいたんですが、娘さんの方もぼくに好意を持ってくれました。だって、ぼくはしかつめらしい老婦人のように行儀良く慎重深くふるまいましたから。そして彼女は本当の美德の鑑なんです。でも、いつかのこと、母親が家の外で仕事をしていた時、ぼくは優しい乙女と二人つきりになりました。すると、ぼくは熱烈な愛情に駆られて、心の丈だけを告白してしまっただけです。彼女はとてもびっくりして刺繍枠からぱっと立ち上がり、逃げ去ろうとしました。でもぼくが、どうか騒いだりしないでください、行い正しく真面目にあなたのご愛顧を求めよう、と誠実な気持ちで参ったことを天

地神明に掛けて誓います、と懇願して押し止めました。とうとうあの娘はぼくの言葉を信じてくれ、いくらか落ち着いたので、ぼくは、どうしてぼくの心が彼女への愛に燃え立ったのか、事の顛末を全部打ち明けました。あの娘は、ぼくが軽はずみにも恋のためにご奉公していたご主人である伯爵様の許から出奔したことを優しい言葉で咎め、いったいどうやって奥さんを養うおつもり、と訊きました。そこでぼくはしどろもどろになってしまい、この意表を突いた質問に答えられませんでした。ぼくは達者な二本の腕を持っていますが、これできつと彼女のために生計を立てて行けるだろうなんて、あつげらかんと言えつこありません。日雇い賃金で働く者なぞちゃんとした娘さんには不向きもいとこなんじゃないか、と心配でしたから。

あのひとは思いやりに満ちた表情でぼくを見つめていましたが、こう続けました。『フリードリン、私たちお別れしなくちゃ。二度ともうこんな仮装で私に会いにいらしてはだめ。この家の扉はあなたには永久に閉ざされたままになります。私の貞潔は非の打ち所がありませんけど、私の心は弱いんですもの。誘惑は錠の下ろされた扉を簡単に通り抜けられるってことを、あなたは私に教えてくれたわ。父は私を修道院に入れようと決めていました。これから私は急いでこの天職に従います。修道院にお納めしなければならぬお金は縫い針さんに稼いでもらいましょ。それではご機嫌よう、さようなら。百哩離れたところへいらしてね、おかしな勘繰りでもされて私に悪い噂が立たないように。』彼女は、立ち去るように、とぼくを急ぎ立てました。ぼくは従わざるを得ず、彼女と別れました。ああ、なんという苦い葉だったことか。ぼくは宿にしょんぼり戻り、悲嘆と絶望で手を揉みしぼり、安らぐことなく、夜昼啜り泣き、かきくどきました。昼間は百回も彼女の家がある通りを行ったり来たりし、どこかの教会でミサの鐘が鳴ると大急ぎで駆けつけ、もう一度彼女の姿を見ると、彼女を待ち侘びました。でも徒勞でした。彼女は神秘なもののようにぼくの目から隠されたままでした。三度ぼくは広い世間へ出ようとあの町を後にしました。で

も立ち去ることはできませんでした。まるであそこに呪縛されたかのように。ある朝、ぼくはもう一度女に仮装して家に入り込み、彼女に永遠の別れを告げようと試みました。とても重苦しい気持ちで戸口で呼び鈴を鳴らしました。母親がやって来たのですが、ぼくの姿を見るなり、窓を急いで閉め、中からこうがみがみ罵ったもの。『この魔女め、おまえみたいな女古着屋風情にや金輪際<sup>こんりしやい</sup>うちの敷居は跨がせないよ。金を払わない女なんぞは』。この言葉でぼくはお利口なルツィーネがどんな口実を設けてぼくの告白を母親に内緒にしたのか分かりました。さもなければ母親は良いいお顧客さんを失くしたことをおもしろく思わなかったでしょうから。これでぼくはあの素晴らしい乙女をもう一度目にする望みをすっかり絶たれ、町を去って、主人を持たない従者として国中を彷徨っているのです。苦惱で完全にぼくの胸が張り裂けてしまうまで。

ペーター親方は旅の道連れ<sup>ツェル</sup>の虚心坦懐な物語に大層注意深く耳を傾けていたが、自分の留守の間、我が家に起こった秘密の事件について真実の報告をする旅の者と仲間<sup>ツェル</sup>にさせてくれた幸運な偶然を内心喜んだ。フリードリンが話を



終えると、彼はこう言った。「あなたの物語は変わってるねえ。でもまだ一つ、わたしにはよく分からんことがある。あなたの恋人には父親がいることを忘れちゃいま。なぜその男に打ち明けなかったんだね。そうしてたら多分その男は求婚の仲立ちになつてくれて、あなたのようなどうやら健気な若者に子どもをやるよ、と約束したかも知れないぞ。」「ああ」とフリードリンは応えて「父親というのは悪者で、呑んだくれで、酷い<sup>むご</sup>ことに妻と子どもを置き去りにしていなくなった浮浪人なんです。そ

れに、その男がどこにいるのかだれも知りません。気難し屋の女房がよく亭主のことでひどく不平を並べ、あの可愛い娘をぎゃあつく叱り飛ばしてました。路銀として名親の祝い金を掠め取られたのに、あのひとが父親の肩を持つたんにね。もしあのならず者がほくの手落ちたら、ほくはそんなことをした報いにあいつの髻を雀り取ってやりたい」。ペーター父さんは、こんな具合に讃辞を呈されて、深く傾聴し、この若者が我が家の家庭内の事になんでも良く通じているのにびっくりしたが、その熱情は一向気にならなかった。彼は、フリードリッヒこそ自分の計画に殊の外ぴったりな人間で、彼を自分の財産の保管者にすれば、これを楽しむ際故郷の町で人の噂の種になるのを完全に防ぐことができ、掘り出した財宝を貪欲な妻から隠しておける、と考えた。「なあ、相棒」と彼は言った。「手を出してごらん。わしは占いを心得ておる。あなたの幸運の星が何を約束してるか、見せなされ」。「約束なんかできっこないと、またしても憂鬱な気分落ち込んだ遍歴の恋人が答えた。「不幸以外は何もね」。

自称手相見は引き下がらなかった。フリードリッヒは自分をただでもてなしてくれた親切な道連れの機嫌を損ねたくなかったので、相手に片手を差し出した。ペーター親方は仔細ありげな顔つきを取り繕い、あらゆる掌紋をじっくり眺め、時々不思議そうに頭を振った。このお芝居を充分長いことやってから、曰く。「あなた、運が好ければ花嫁を手に入れられるぞ。明日太陽が昇ったら、出発して、フランケン国のローテンブルクを目指すのだ。恋人はあなたに忠実で、あなたを愛しておる。さだめしあなたを歓迎するだろう。あなたはたっぷりした遺産相続を間近に控えている。妻を養うには余り有る金と土地がもうすぐあなたのものだ」。「お仲間さん」と、この占い師をおどけ者の冗談好きと思ったフリードリッヒは不機嫌に言った。「不幸せな男をからかうなんてあなたには似合いませんよ。だれか他に打げるやつを探したらいいでしょう。ほくはお目当ての人間じゃありません」。彼はさつと立ち上がり、立ち去ろうとした。ペーター父さんは若者の上着の裾を掴むとこう言った。「行くんじゃない、このぶつぶつ屋。わしはからか



ってなんぞおらん。そしてわしの予言を誓って守る用意があるのだ。わしは裕福な男でな、その遺産を抵当に、あんなが欲しいだけの額を現金で、一度に前払いして進ぜる。わしに随いて部屋へおいで。そうすりゃ、わしの言葉が本当だってことを実地で納得させてあげるよ」。若者は鉄物商人かなあきとの話を書いて調子が狂ってしまい、仰天して目を見開き、蒼褪めていた頬は歓びと驚きに紅く染まった。彼は夢かうつつか分からぬ状態で黙って謎めいた男に従うと、男は部屋の扉の鍵を開け、釘の樽の栓を抜いた。

ここでペーター親方は美しいルツイーネの誠実な恋人に自分のことを率直に告白、宝物の秘密とそれから、フリードリングが娘の夫として金持ちの役目を演じ、自分は隠居暮らしをして、婚殿と一緒に素晴らしい財産を築みたい、とのもくろみを打ち明けた。次の日二人の旅の道連れは上上のご機嫌でハルツ山麓のエルリヒを後にし、フランケン国はニュルンベルクに向かつて元氣一杯舵を取った。この都市でフリードリングは立派な求婚者として装いを凝らし、ペーター父さんは彼の財布に当座の結納金を入れてやり、こう打ち合わせた。用件が首尾良く運んだら、ひそかに使いを出して自分にそれを知らせる。そうしたら自分は、富裕な求婚者がローテンブルクで評判になるように、さまざまな高価な家具調度をだれか運送業者に輸送させることができる、と。

仮定的舅と仮定的娘婿は互いに別れを告げた時、前者は後者に次のような訓戒を餞別に与えた。「舌を慎み、わしらの秘密を洩らすな。あんたの知つてることをだれにも打ち明けるでな

いぞ。口の固いルツイーネがあんたの許嫁になったら、あの子は別だが」。ペーター親方はハルツ旅行の莫大な収益を最晩年まで楽しみ、どれほど豊かなのか自分でも分からないほどの財産を持っていた。読者の費用でそれについての会計報告を公表したりしませんでしたけどね。一方フリードリンは金持ちと呼ばれ、貞淑な妻である器量好しのルツイーネと幸せに満足して暮らした。そして裕福な男と申すものは、その気さえあれば尊敬される男にもなれるわけだから、市参事に地位を得ようと求め、やがて帝国直属都市の至福の最高段階に昇り、現職市長となった。彼を種にしたある言い回しが今日に至るまでなおローテンブルク市民の間に行われている。人人がだれか資産家を形容したい時は、昔の調理主任ペーター・プロツホの婿さんみたいなお金持ち、と言うのである。

#### 原注

(1) こやつ……携えておった これはハルツの貨幣(2)に刻まれている森男(3)である。間違えてブラウンシュヴァイクの紋章の支え像としている者がいくらかある。これは、ここで自分から素性を明らかにしているように、ハルツの山の精なのであって、しばしば鉱夫たちの前にその姿を見せたことのある同地のある豊かな鉱脈にはその名が付けられている。ところで、この恰好はマルティンとつあんにはひどく恐ろしく思えたかも知れないが、勘定の際ハルツグルデンの上にあると、受け取る者の目には極めて心地好い。

(2) アンドレアスベルク……ブルクトリクス王の宝蔵へときさまが掘り開けた穴をなあ プロツケン山にあるといわれる財宝についてのこうした詳細な指示は、この物語の報告者のでっちあげではなく、ある手稿からの引用である。そしてこの手稿は更に古い手稿の写しと思われる。手稿の表題は以下の通り。『ナベテノイトモ秘ヤカニ隠サレシ、イワバ天ヨリ落トサレシ物トモノ記サレタル唯一の書物』*Liber singularis, in quo arcana arcanorum, langquam e coelo elapsa tractantur.*

(3) 見霊者 Geistscher. 見霊者という言葉から著者は先に刊行した第四部の一〇〇ページで犯した罪過(4)を思い出す。これはなんとしても公に償わねばならない、と考える。同所で著者はある功績ある人士に対しこの表現をうっかり用いている。これでこの方の思い出を損なうなどということは著者の本意ではなかった。それゆゑ著者はこの箇所を改換して撤回、読者諸賢に、「ゴータ教養新聞」一七八六年第六二号掲載のこれに関する著者の詳細な声明(5)をご参照くださるよう懇請いたす次第である。

- (4) シュニプス夫人 *Frau Schnyfs* <sup>(註)</sup> 『ゲッティンゲン詩神年鑑』一七八二年、一四六ページ。
- (5) 名高き宮廷の若き画家 *Der junge jung Maler am Hofe* <sup>(註)</sup> 思家および多情多感な人士のためのあるドイツの物語。ウィーンおよびライプツィヒ、一七八五年。
- (6) あるインドの副王が、アウドの美姫たちをギリシア風の衣装で衆目に曝した。ヘイステイングズ氏が、幾人かの生まれながらの王女たちを、売り値を吊り上げるために裸体にして奴隷市場で競売に掛けた、という彼に対するある有名な告訴。
- (7) 文学上の黒人奴隷貿易請負によって、精神の所産だ、などと言いつつ、精神の所産だ、などの山「ライプツィヒラテン語新聞」一七八六年第三二号。

訳注

- (1) 皇帝ヴェンツェル *Kaiser Wenzel* 一三六一—一四一九年。ドイツ王（在位一三七八一—一四〇〇）・ローマ王（在位一三七六一—一四〇〇）・ボヘミア王（ボヘミア王としてはヴァーツラフ四世。在位一三七八一—一四一九）。名君だった神聖ローマ帝国皇帝カール四世（在位一三五五—一三七八）、ドイツ王・ローマ王、ボヘミア王（ボヘミア王としてはカレル一世。在位一三四六一—一三七八）の長子。どうやら不肖の息子だったらしく、酒癖が悪く乱暴だった、といわれる。一三九四年五月八日、彼の無能かつ暴虐な政治に憤激したボヘミア貴族の有志は同盟して彼を逮捕、彼の従兄弟モラヴィア辺境伯ヨープスト（チエコ語ヨプスト）を摂政とした。しかし彼の弟ゲルリッツ公ヨーハンの介入とファルツ伯ルツプレヒト二世の調停のお蔭で、拘禁されていたオーストリアのヴィルトベルク城から同年八月一日に釈放された。以後ボヘミアの本質的な統治権を放棄。従って、彼に心服していた少女とともにブラハ（ドイツ語ブラーク）の城から逃げ出した、というのは伝説に過ぎない。一四〇〇年ラインの四人の選帝侯によってドイツ王・ローマ王の位から退位させられる。ローマで戴冠はしていないから正式に神聖ローマ帝国皇帝とは言えないのでないか、と思うが、皇帝としての事典もある。「リプツァ」解題をも参照。
- (2) バルトロメウス祭 聖バルトロメウス（バルトロマイ）。十二使徒の一人。言い伝えによればインド、メソポタミア、パルティア、アルメニアなどで伝道、アルメニアで殉教したことになっている。生きながら皮を剥がれ、そのあと斬首された、とのこと。バルトロメウス祭は八月二十四日。
- (3) フランケン *Franken* 現ドイツ連邦共和国バイエルン州の北部、メイン河の流域を占める豊饒な地方。上フランケン、中フランケン、下フランケンに分かれる。
- (4) ロートンブルク *Rothenburg* ロートンブルク・オブ・デア・タウバー *Rothenburg ob der Tauber*。谷間を流れるタウバー川を見下ろす位置にある。中フランケンの西端、いわゆる「ロマンティック街道」（ヴュルツブルクからフュッセンまで）のほぼ中間にあり、中世の面影をほぼ完璧に残している町。神聖ローマ帝国直属都市として繁栄したが、ドイツを中心に荒れ狂った三十年戦争（一六一八—一六四八）で衰退。

- (5) クリンゲン門クリンゲンの外にある聖ウォルフガング教会。どちらにも今に残っている。クリンゲン門はローテンブルクの北の市門。
- (6) 旅籠屋の黄金志亭黄金志亭。黄金の仔羊を描いた看板が出ている旅籠屋。
- (7) シヤルマイ。ダブルリードのついた中世の木管楽器。オーボエの前身。「リユーベツァールの物語」、「泉の水の精」にも出る。
- (8) マリア様が山地を越えていらした時のご機嫌。テューリンゲン地方の天候に関する言い伝えにこうある。聖母マリアがエリサベトをご訪問になった祝日（「マリアのご訪問日」七月二日。一九七〇年以降ドイツ語圏外では五月三十一日）に、マリア様が山地を越えていらした時が晴れなら、お帰りに雨となる。雨なら、お帰りに晴れとなる、と。天使ガブリエルによってイエスの誕生を予告された処女マリアは当惑したが、ガブリエルは更に彼女に、彼女の親類で不妊の女性とされていたエリサベトも妊娠している、神にとって不可能なことはない、と言った。マリアはナザレから山地を越えて遠いユダの町に住むエリサベトのもとに出掛け行き、共に妊娠を喜んだ。エリサベトが生んだ男の子が「洗礼者ヨハネ」（新約聖書ルカ伝一章）。
- (9) 七人の眠れる聖者がたの星相が晴れたの曇りだの。七人の眠れる聖者（「七人の兄弟」とも）とは、ローマ帝国皇帝デキウス（在位二四九―二五〇）の時代小アジアの古都エフェソスの住人だったが、キリスト教徒を迫害する皇帝から逃れて、二五一年エフェソス近傍とある洞窟に逃げ込んだ。そしてここで寝込み、目を覚ましたらキリスト教が公認されて久しい東ローマ帝国の、皇帝テオドシウス二世支配下（実際はその姉で女皇の称号を持つブルケリア（三九九―四五三）のかなり賢明な統治下）の四四六年だった、とのこと。エフェソスの司教他名士の面会、また一説では皇帝テオドシウスも、洞窟に彼らを訪れた。七人はこの人人に身の上話を語り、祝福を与えたのち、安らかに息を引き取ったそう。祝日は六月二十七日。この日の天気は以後七週間の天候を左右するとか。なお「三姉妹物語」訳注ではもっと簡単に記した。
- (10) 曠野草 *Heidekraut*。英国でいうヒースの類、と思えばよからう。これは曠野わづらに生える低木で、白・紫・淡紅色の鐘状の可憐な花を付ける。ハイデクラウトは正確にはカルナ・ヴルガリス（稗柳擬）を指すが、ヒースといえはこの他に躑躅科エリカ属のエリカ・テトラリクスをも含むようである。
- (11) シュレスヴィヒのお天気古い者の雄鶏の啼き声。未詳。シュレスヴィヒ *Schleswig* はエラン（ドイツ語ユトランド）半島の根元近くにある古い交易都市。また、長く続いた同名の公国の首都。現在シュレスヴィヒ・ホルシュタインはドイツ連邦共和国最北の州。デンマーク王国と接する。
- (12) 灯火あかりを……柀の下で予言したかったに過ぎない。「灯火を柀の下に置く」とは「自分の能力を包み隠す」の意。新約聖書マタイ伝五章十五節から。逆に「灯火を祖国全ドイツの燭台の上に置く」とは「才能をドイツ中に輝かせる」となる。だから、ここでムゼーウスが言いたかったのは、羊飼いたちが「天気の予報を全国に告げ知らせようというのではなく、慎ましやかにローテンブルク周辺地域に限っての日和判断をやりた



かったに過ぎない」くらいのこと。

(13) 人狼 「泉の水の精」 訳注参照。

(14) 聖アンドレアス様の祝福 聖アンドレアスは十二使徒の一人聖アンデレ。聖ペテロの弟。ギリシアでX型の十字架に縛り付けられ、殉教した、と言われる。ロシア、ギリシア、スコットランドの守護聖人。また、漁師、肉屋、網作り職人、の守護聖人。祝日は十二月三十日。「聖アンドレアス様の祝福」とは野獣を追い払う呪いとして聖アンドレアスに呼び掛けること。

(15) ショッペン 昔のドイツの液量単位。約二分の一リッター。ムゼーウスの他の物語にもたびたび出る。

(16) 信仰篤い大牧人ヤコブ *der fromme Erbarhe Jakob*。アブラハムの子イサクの双子の息子の一人。別名イスラエル（神と格闘せる者）。双子の兄弟エサウのあとから生まれたが、あじまの ひとまめ 扁豆（扁豆、レンズ豆）の煮物と交換に長子権を譲り受け、また、年取って目が見えなくなった父イサクからエサウが受けるはずの父の祝福を騙し取った。そこでエサウはヤコブを憎んで、父が死んだら、弟を殺そうと考えた。二人の母でヤコブの方を愛していたリベカはこれを知り、自分の兄ラバンのもとへ旅立てるようにする。ヤコブは伯父ラバンの二人の娘レアとラケルを妻とした。また、二人の妻がそれぞれ側女として差し出した婢女とも契った。彼女らの胎から十二人の男の子が生まれたが、これがイスラエルの十二支族の祖である。ヤコブは家畜を増やす技術に大層優れていて豊かになった。旧約聖書創世記二十五章―三十二章。

(17) 熟成葡萄酒 *Femwevin*。Femweinとも。醱酵の終わった若いワインは樽の中で香と味わいを増し、ごくのある熟成ワインとなる。更に壇に詰められ、暗く涼しい静かな穴蔵の保存され、壇の中でも熟成が進む。従って去年物のワインをも指す。

(18) バンベルク *Bamberg*。「屈背のウルリヒ」の訳注参照。

(19) 読誦ミサ 歌唱やオルガン演奏を伴わないミサ。

(20) ハルツ *Hartz*。北ドイツの中級山岳（標高二〇〇メートル以下で、山頂、山稜のなだらかな山地のこと。中山型山地とも）地帯。ブラウンシュヴァイク、アンハルト、ハノーファー、ザクセンにまたがり、面積はほぼ二〇〇〇平方キロに及ぶ。おおむね平坦な卓状地で、西部で六〇〇メートル、東部で四〇〇メートルといった中ぐらいの高さである。ハルツの最高部は標高二四二メートルのプロッケン山。ハルツ山地はかつて銀を豊富に産出した。

(21) 録しるされることだぞ 新約聖書マタイ伝四章にいわく。荒野で悪魔に誘惑されたイエスがそれをことごとく拒み、最後にこう言う。『サタンよ、退け「主なる汝の神を拜し、ただこれにのみ事つかへ奉るべし」と（聖書に）録しるされたり』（十節）。そうすると悪魔は離れ去った、と。

(22) アンドレアスベルク *Andresberg*。ザンクト・アンドレアスベルク *St. Andresberg* のこと。上ハルツにある。十六世紀に鉱山町として開けたが現在は保養地。

(23) 矢が届くくらいのところ 二〇〇歩から三〇〇歩の距離と考えればよからう。なお、「屈背のウルリヒ」訳注をも参照。

(24) 一エレ 昔の尺度。五〇—八〇センチ。

(25) 開錠根 シクリンツァルツェル 根。この物語にあるように、どんな錠（あるいは錠に類する物）でもたちどころに開く強力な魔力を持つ、と中世ヨーロッパで民間信仰の対象となっていた植物。甘野老、ホルト草、恋茄子など諸説あつて分ならず。DS九番「開錠根」には、それを入手する方法について、この物語にあるのとはほぼ同様の記述がある。ムゼーウスもグリム兄弟が用いたのと同じ資料（アルベルトウス・アルゲンティン）に拠ったか。

(26) 射石砲 石弾を発射する中世の大砲。

(27) こりや 教会の略奪をやらかすようなもんだ 教会、特にカトリック教会は内陣に金銀の装飾が豪華になされていたり、宝物庫にも宝石や貴金属から成る祭具が数多く所蔵されていることが少なくない。ドイツを中心に荒れ狂った三十年戦争時代、新教軍、旧教軍それぞれによる相手側の一あるいは、自らの教派に属するものも含めて——教会の略奪は日常茶飯事だった。もとより聖物冒瀆である。こうした言葉を吐くハルツの森男はキリスト教化されていると見える。

(28) 「アルクトリクス王 König Braktorix. 未詳。となたか」教示を。

(29) 熊啄木鳥 Schwarzspecht. 啄木鳥目啄木鳥科の鳥。全体が黒色で、頭頂部は鮮紅色。

(30) 醗酵している葡萄酒塚からコルクの栓がすつ飛ぶ。炭酸ガスが沸いている発泡酒、たとえばその代表であろうフランスのシャンパンの栓は針金できつく縛ってありますから、その心配はありませんし、針金を上手に緩めれば、すつぽんと自然に栓が抜けます。でも、搾った葡萄酒をそのまま、あるいは砂糖を混ぜたりして、壘に詰め、普通に栓をしておけば、これはこの通りになります。宮澤賢治の「葡萄酒」で、野葡萄酒をいっぱい採って来て、搾り、砂糖を混ぜ、二十本の壘に詰め込んだ耕平の顛末をお読みになった方はよくお分かりでしょう。

耕平が、そっとしまった葡萄酒は

順序ただしく

みんなはじめてでなくなった。

ただしコルク栓の発明は近世になってから。

(31) 細草 Kraut Spickenardi. シュピックナルデンは、吉草、細草（ヴァレリアーナ、バルドリアン）。その根茎を乾かした褐色で芳香を有し、苦味のある古草根、あるいは、細草根は漢方で鎮静剤として用いられる。「メレクザラ」にも出る。

(32) 黒梅擬 Kreuzdorn. 黒梅擬科の落葉灌木。高さ一、五メートル。実は黒く濁下剤とし、若葉は食用となり、材は堅く細工用。

- (33) カルトウジオ会派の修道院 フランス語ではシャルトル修道会。一〇八四年聖ブルーノによりフランス南東部、スイス、イタリアとの国境に近い曠野ラ・シャルトリューズ(グルノーブル近郊)に作られた隠棲修道士の修道会。一七六六年教皇アレクサンデル三世の追認を受ける。修道士は祈祷、学問研究、手仕事に励み、独房でほとんど沈黙を遵守、肉食をしない。修道衣は白。イゼール県にあるその最も名高い修道院ラ・グランド・シャルトリューズの修道士たちは葉草リキュールであるシャルトリューズを醸造している。なお「三姉妹物語」にも出る。
- (34) 調理主任 「ガールコッホ」Gartchoiとは元来市民軍の従軍酒保商人のこと。その装備一切は軍用車輛で軍と一緒に移動した。平時時には市内で「ガールキュッヒエ(調理主任の厨房)Gartchileを開くことを許された。これは市所有の施設で、酒と食事を提供する料理店であり、公衆を客とし、麦酒、葡萄酒、火酒を飲ませ、外来者を宿泊させる権利を持っていた。
- (35) 水道管理人 都市の井戸(泉、噴水)の管理者。
- (36) 帝王と寺男との差 帝王 Kaiser と寺男 Küster という、身分では天地の差があるが、同じ頭字を持ち同じ脚韻を踏む単語を並べている。
- (37) 大雷鳥 Auerhahn. ヨーロッパでは野雁に次いで最大の鴉鳥で、森の鴉師たちにとって昔から今に変わらぬ嬉しい獲物だが、食通にとつてはこれまた依然として厨房の脅威。「鴉人の喜び」であるこの鳥の肉は樅の樹皮のように硬く、鹿革のように強靱、豆殻のようにばさばさしている。なので、食膳に供し得るようにするために、極めて多種多様な調理技術(熟成するように吊るしておく、香味野菜と共に酢・油・葡萄酒・塩・香辛料の混合液に漬けておく、土の中に埋めておく、など)を駆使しなければならない。「リブッサ」訳注をも参照。
- (38) 黄蓮風味の甘い汁 直訳は「ヘーメルン風味の甘い汁」。「グリムドイッ語辞典」によれば、「ヘーメルンはウエラトゥルム・アルブム、ニースヅルツ(馬の足型科)とある。毛萹は金鳳花ともいうが有毒。しかし同じ馬の足型科でも白い花の咲く黄蓮は根を健胃剤にするので、これが、と思う。
- (39) 凍膏 鴉獸・鴉鳥の肉、野禽・家禽の肉、仔牛の脚、豚の耳、(この場合)魚などの煮汁、素材の碎片、香味野菜をゼラチンで固めた物。大食漢も美食家も満足させる料理。
- (40) シュナン葡萄酒風味平丸菓子 Syrandthaden. Syrandt は chenin blanc である。「シュナン・ブラン」は発泡性、非発泡性いずれの葡萄酒にも造る白葡萄酒。
- (41) 樞榨 Quite. 薔薇科の落葉喬木。中央アジア原産。果実は黄色で円く、表面を綿毛が被っており、甘酸っぱくて香気が高い。普通砂糖漬として使用する。
- (42) 焼き菓子 バイ生地で果物のジャムやムースを包んで焼いた分厚い菓子が果物トルテ。
- (43) 豚の頭料理 西洋松露の香豊かなたっぷりした詰め物などで上手に調理された猪や豚の頭は、(繊細な女性方も同席する食卓ならともかく)男性だけの饗宴の場合には特に好まれる花形の一品である。北ドイツではワイン酢で煮て、カラメルを塗り、冷たいペルリンソース(卵黄、

- 油、酢、芥子、酸塊すゐくわいのゼリーで作る」とともに供される猪の当歳仔の頭が好まれる。
- (44) 完璧イルゼ vollbrechts Ise. 一応「完璧な」の意に取ったが、vollbrecht については自信が無い。『グリムドイツ語辞典』には載っていない。近い音である vollbrechtigt ヌーヴツツ訳した。
- (45) 野薔薇の実 Hanbutte. Hagebutte のこと。食用になる。酸塊に似ている。
- (46) 毒人参の汁 Schieringssaft. コニウム・マスカラトゥム・リンネの汁。古代ギリシア人は死刑囚にこれを服ませた。ソクラテスがアテナイ政府から受けた判決も、これによる死であった。毒人参は芹科の越年性草本。丈高く、蕪状の根を持ち、莖は芯が空洞で赤紫色の斑点がある。葉は羽状複葉。夏、散形花序の白い小さい花を咲かせる。全草に猛毒を含む。
- (47) ゲオルク坊主 Gergel. ありふれた男の名であるゲオルクの訛った縮小形。ゲルク Gerg、ゲルゲ Gergel とや。
- (48) スポンを履かせてからは ヨーロッパでは十九世紀あたりまで幼児期には男の子でもスカートで、プリーチエズや長ズポンを履かせるのは少し大きくなってからだった。
- (49) 鶏冠料理 雄鶏の鶏冠は古代からヨーロッパや中国で好まれた。ドイツでは特に老鶏（隔年鶏）の鶏冠が美味だとされる。
- (50) 「女房、童ごさ鶏の腿ごば呉てやれじゃあ」原文は以下の通り。Weibela, gib doch dem Bibela a Schlägelä von dem Hennela.
- (51) 菲沃斯越幾斯 茄子科の一年生または越年生草本である有毒植物ヒヨスの葉から製した粘液で、薬用とするが劇薬。
- (52) 土掘りはやりたくないし、物乞いは恥ずかしい 新約聖書ルカ伝十六章三節の引用。
- (53) 世界創造 天地創造。旧約聖書創世記一章。
- (54) 貞深なスザンナ die keusche Susanna. 旧約聖書外典「スザンナ書」の貞女。バビロンの虜囚とされたユダヤ人の一人ヨアキムの妻スザンナは、自分の庭園で沐浴中、ユダヤ人の中から裁判官として選ばれた二人の長老に暴行されようとして抵抗した。長老たちは共謀して、却って彼女がある青年と木の下で情交したのを目撃したと告発。彼女は姦淫の罪で死刑にされようとする。しかし、賢いタニエル（伝説の名高い裁き手）これを見抜き、二人の長老を別別に隔離しておいて、スザンナが情交したのは何の木の下だったか、と証言を求める。長老たちはそれぞれ異なった木を挙げる。そこで彼らの偽証が明らかになり、スザンナは無罪、長老たちが死刑となる。
- (55) ツェレのあの技芸に長けた三人姉妹 未詳。ツェレ Cille (ムゼンウスは無罪、長老たちが綴っている) は北ドイツの美しく古い町。古来塩の産地として有名だった近くのリュエネブルクとともにリュエネブルク曠野ハルツェン探訪の拠点。
- (56) 三パツェン貨 南ドイツとスイスで流通した昔の銀貨。パツェン銀貨 Batzen は十五世紀末ベルンで初めて鑄造された。熊 Bat=Bäz の模様が付いているのでこの名がある。一パツェンは四クロイツァー（銅貨）に相当。
- (57) 動物精気 「ローラントの従士たち」、「奪われた面紗」、「沈黙の恋」にも出る。

- (58) 聖ヴェロニカ die heilige Veronika キリストの聖衣布で有名。キリストが十字架を負ってゴルゴタの丘に向かう途中、その顔に汗と血が滴った。ヴェロニカという名の女性がそれを拭えるように亜麻布を差し出した。キリストはこれを受け取り、布に顔を押し付け、微笑んでそれをヴェロニカに返した。すると布にはありありとキリストの顔が写されていた。聖衣布を扱った優しく美しいヴェロニカの絵（一四一〇年頃）がミュンヘンの旧絵画館にある。聖ヴェロニカ崇拜は四世紀まで遡る。
- (59) ご聖体の祝日 カトリックの華やかな大祝日。聖体顕示台を捧げた聖職者を先頭に教区を練り歩く厳かな行列が楽しい。聖霊降臨祭後の最初の日曜日後の木曜日。
- (60) 顔 Dosenstück 「ドゼンシュテュック」とは元来「喫き煙草入れ」（蓋付きの円筒形あるいは楕円形の容器）のこと。容器表面にはしばしば美しい女性が描かれている。そこでこんな表現が用いられているのだが、難解極まる。
- (61) 頭巾掛け 頭巾の形を崩さないための頭の形をした台。「沈黙の恋」にも出る。
- (62) 大ギリシアの自由帝国都市クロトン die freie Reichsstadt Kroton in Großgriechenland 「大ギリシア」とは南イタリアのことで、ここはギリシアの殖民都市が多かったため、後にローマ人から大ギリシアと呼ばれた。「自由帝国都市」に相当するものは勿論古代ギリシアには存在しないが、ここでは画家がベーター親方に分かり易いようにこんな話し方をしていて、との設定。「クロトン」はラテン綴りでは Cronon。南イタリアの東岸に紀元前七〇〇年に建設されたアカイアの殖民都市。とりわけ紀元前五、六世紀に繁栄。現代のコトローネ。
- (63) ゼウクシッポス Zuxis 紀元前五世紀末頃活躍したギリシアの画家。美人画と写真で有名。初めて目の感覚を欺く錯覚の原理を絵画に導入した。彼がトロヤ戦争の原因となった絶世の美女ヘレナの姿を描く折、南イタリアの都市クロトンの最も美しい乙女たちがモデルとなった。
- (64) グルデン金貨 最初フィレンツェで、後にはヨーロッパ各地で鑄造された金貨。十七世紀半ば以降にはおおもむね姿を消し、代わってグルデン銀貨の登場となる。
- (65) 油鞣革 魚油で鞣す事により柔らかくなった洗濯の利く皮革。
- (66) ドウンス「ばか」 Duns 「リヒルデ」でも宮内卿の名として出る。
- (67) 慈しみの女神 Eumetide ギリシア神話の復讐の女神たちやローマ神話の復讐の女神たちがその怒りを発しない場合、これを慈しみの女神と呼び、尊崇の対象とする。
- (68) ネクター オリュンポスの高処でギリシアの主だった神が練り広げる果てしない饗宴で飲む飲料。食べる物はアンプロシア。「ローラントの従士たち」にも出る。
- (69) 一ヘラー、一プフェニヒ いずれもごく小額の銅貨。
- (70) ハルツのポトシ Harzpotosi 今日のパリヴィア共和国の町ポトシ周辺はムゼウスの時代には、イスパニアのリオ・デ・ラ・ブラータ副王

国に属する、十六世紀半ばからの計り知れない銀の産出（世界最大の銀鉱脈だった。現在は衰退）でぬきんでた地方だった。ポリヴィア国旗の中央の絵はこのポトシ鉱山を表わす。メキシコの内陸都市サン・ルイス・ポトシもかつて金銀鉱山で有名だったが、そのポトシの名は前者から取ったもの。

(71) 気球 モンゴルフイエ兄弟作成の気球が史上初めて飛翔したのは一七八三年。ムゼーウスは彼の物語「奪われた面纱」に「——あるいはモンゴルフイエ風のお伽話」と副題を付けている。同物語訳注参照。

(72) チェレミス族 ヴオルガ河左岸に住むフィン系の種族。

(73) コルキスの黄金の羊の裘 コルキスは黒海の奥にあつたという王国。黄金の羊の裘はこの聖なる森にあつて、火を吐く龍に警護されていた。巨船アルゴーに乗り組んだイアソンを頭とする五十人のギリシアの勇士の目的はこれを手に入れることであつた。なお、「リブツサ」訳注参照。

(74) 聖エギディウス様の日 十四救難聖者（特定の窮境にある時援助を期待できる十四人の聖者。「リユーベツァールの物語」訳注をも参照）の一人聖エギディウス *der Heilige Ägidius* の祝日は九月一日。この日は民間では秋の始まりとされる。

(75) 四紋、カトリック教で人間の四つの最後の重大事とされる死、審判、天国、地獄の総称。

(76) 城内平和 非常時における内部的抗争の中止。

(77) 緑の木 曜日 復活祭前の木曜日。洗足木曜日。聖木曜日。この日九種類の香味野菜から作ったスープを食べると熱病に罹らない、という民間信仰がある。「泉の水の精」でもこのスープに言及。

(78) 和蘭芥子 *Brunkel*、クレソン。水芥子。水辺に自生する、香氣と苦味のある香味野菜。

(79) 聖マルティヌス祭の鷲鳥 聖マルタン・ド・トゥールの祝日十一月十一日（この日は冬の始まりとされる）にはヨーロッパのさまざまな国で鷲鳥料理を食べる習慣がある。

(80) 榛の木 *Erl*、樺の木科の落葉喬木。高さ約二十メートルに達する。

(81) こくまる鳩 *Dohle*、「愛神となつた精霊」訳注参照。

(82) 不死鳥 *Phoenix*、エジプト人の間に伝承された霊鳥。五百年ごとに自らの巢に火を放つて焼け死に、その灰の中から新たに生まれ出る、と言ふ。

(83) ヘンマリーング親方 *Meister Hammering*。元来は「ハンマーを職権の徴として携えている者」の意。悪魔、死刑執行人、道化役。「ハンマリーング」だけだと「妖怪変化」の意にもなる。

(84) 死刑執行人 中世では死刑執行人と刑吏は区別され、前者は古くは斧、その後は処刑用の大剣で死刑囚の斬首を行い、後者は絞首刑、車裂き

刑、四つ裂き刑、火刑、拷問などに従事したが、区別はその後消えた。死刑執行人は通常都市の役人であって、その業務のそれぞれに応じて良い報酬を受けたが、一方、子弟たちにその職業を継がせることを強制されたし、子女の縁組も他の都市の同職種の一族としかできなかった。十九世紀になっても、ある田舎町の居酒屋で、ハンブルクから出向いた死刑執行人の徒弟の一人と、それと知らずに仲良く酒を酌み交わしたその町の近傍に住まう実直な青年が、事が明らかになった途端、家族、友人、村落共同体から締め出された例がある。真紅の外套は死刑執行人が職務を遂行する場合の装束。

(85) もし事の次第が漏れようものなら……もはやだれも彼に返杯してくれまい。差別の対象にされてしまうのである。

(86) トビアスとつつあん Altvater Tobias. トビアスは誤りで、その父トビト Tobit である。旧約聖書外典「トビト書」によれば、義人トビトは睡眠中何羽かの雀から両眼に暖かい糞を掛けられ、それがもとで目に白い膜ができ、失明してしまった。

(87) 着衣式 カトリック教で僧や尼僧がその服を纏って聖職に入る式。得度式。

(88) 聖ウルズラ修道女会 女子教育と病人看護のため一五三五年（だからムゼーウスがこの物語の背景としている時代には残念ながらもまだ存在していない）に設立された修道女会。聖ウルズラ（沈黙の恋）訳注参照）に因む。

(89) 家の守護神 Pentecost. ペナテス Penates とはローマ人が信じていた家の守護神たち。その名の由来は食器部屋から。この神は食器部屋に祀られており、家の主人がそれらの祭司だった。「ペナテスを祝福する」とは「家をあとにする」くらいの意であろう。「ローラントの従士たち」にも出る。

(90) 名親のくれた祝い金 カトリック教で洗礼式の際立ち会った名親（名付け親。代父・代母）が贈り物としてくれた金。

(91) 家ノ秘事 arcana domus. ラテン語。

(92) 占い棒 水脈や鉱脈のありかを見つけるために用いる占い棒で、水脈や鉱脈の近くに来ると、びよこびよこ動く。

(93) ニコール・リスト Nikol List. 泥棒にして強盗。ヨーハン・ルドルフ・フォン・デア・モーゼルトと名乗ったこともある。ほぼ一六五六一六九九年、その犯行のため全ドイツで恐怖の対象となった。一六九八年実行されたリューネブルク市庁舎の有名な宝石を鑲めた黄金の銘板の略取はその名人芸の一つとされた。リューネブルクは一千年の昔から塩の産地として栄えた。現在は静かな歴史の町。

(94) 悪魔 Baal. 古代フェニキア人、カナナン人たちが崇拜した太陽神。彼らの土地へ侵攻したヘブライ人はこれを邪神とした。従ってキリスト教でも、邪神、ないし、悪魔の代名詞である。

(95) 硫黄糸 硫黄液に浸した撚り糸。

(96) その屍を……埋葬される 処刑された者の死骸はこのように処置された。

(97) ラ・モット夫人 Madame la Motte. 当時全ヨーロッパを震撼させた「王妃の頭飾り事件」（一七八五）を指す。詐欺師のジャンヌ・ド・サ

ン・レミ・ド・ヴァアロア、自称ラモット・ヴァアロア「伯爵夫人」Comtesse de Lamotte-Valois (一七五六一—一七九一)。フランスの古き名門ヴァアロア家の血は引くが、ひどく落魄した貴族と彼に騙された下層の女を両親として生まれた。しがたない憲兵士官で自称伯爵のニコラ・ド・リュズ・ド・サン・レミと結婚して伯爵夫人を名乗る。に唆され、行状が芳しくないためフランス宮廷で失寵していた枢機卿ルイ・ルネ・エドゥアール・ロアン(一七三四—一八〇三)はある高価なダイヤモンドの頭飾りの購入とその資産で保証、これを献上することによって王妃マリイ・アントアネットの寵遇を確保しようとした。女詐欺師は装身具を拐帯して逃亡しようとしたが、ロアン同様逮捕された。後者はバリの議會によって無罪の判決を受けたが、ジャンヌは公衆の前で肩に烙印を押され、無期禁固刑を宣告された。もともと一七八七年脱獄することによって成功。一七九一年ロンドンで死去。フランス革命前の極めて悪評高い醜聞事件である。ラモット・ヴァアロア伯爵夫人の背後には当時有名な山師であった自稱カリオストロ伯爵アレックスサンドロ、本名ジュゼッペ・バルサモ(一七四三—一七九五)「屈背のウルリヒ」訳注参照が控えており、彼もバステイーユ監獄に収監され、一七八六年追放された。マリイ・アントアネットはこれには全く関与していなかったにも関わらず、ロアンと情交して頭飾りを手に入れようとした、との風評を立てられた。

(98) 枢機卿が…その破片で肌を傷つけた。当時の新聞でそう報道されたのだろう。

(99) 郷土「ユンカー」は、十九世紀初頭まではエルベ河以東の土地貴族、地主貴族の意味で用いられたが、ムゼーウスは「リップッサ」において副主人公プリミラス(プシエミスル)にこの称号を与えている。プリミラスはある騎士の子息だが、自身額に汗して農業に従事していた。従って日本の半農半士の身分層であった「郷土」を「リップッサ」での訳語とした。もともと本文の場合ムゼーウスは、英国の紳士階級のように、世襲貴族ではないが広大な土地を持つ有産者を「ユンカー」としているようだ。「誘拐」ではこの意味で使われている。「誘拐」訳注をも参照。

(100) 扁豆を針のめどを通して投げる。こうした諺的慣用句が存在するかどうか未詳。もちろん「富める者の神の国に入るよりは、駱駝(太綱)の誤説(?)の針の孔を通るかた反つて易し」(マタイ伝十九章二十四節)なる章句は周知だが。

(101) 優しいプシユケが愛神を愛した。ルキウス(アプレイウス)とされる紀元二世紀のローマ文学『変身譚』(通称『黄金の驢馬』)の一挿話を形成する恋物語。絶世の美女である女王プシユケは美の女神ウエヌス(アプロディーテ)の怒りを買う。ウエヌスは彼女に不幸な恋をさせようと、愛神である息子クビード(エロス)にその矢を使わせるが、クビードはうっかりして黄金の矢で自分自身を傷つけ、プシユケに惚れ込んでしまう。彼は恐ろしい怪物をよそおい、高山の山頂にプシユケを置き去りにさせ、宮殿に引き取って、姿を見せないまま、彼女と愉しい新婚生活に入る。プシユケは、夜姿を見てはいけない、との夫の戒めを破り、灯火でその美しい姿を見、油で火傷を負わせる。愛神は怒って失踪する。プシユケはいとしい夫の愛を回復しようと、散散の難儀をして、無事に再び添い遂げる。鈴木滿著『昔話の東と西 比較口承文芸論考』(国書刊行会、平成十六年)所収「糞虫はだれの子か」四をも参照。



- (102) 二人ツタきりの話 *Tete-a-tete*. フランス語。顔と顔を見合わせて。
- (103) 砂男 *Sandmann*. 「砂鬼」。月に棲んでいて、人間の子の目玉を持ち帰るために、子どもたちの目に砂を振り掛けるという。つまり「眠たくて目が潰くなった」は、ドイツ語圏では「砂男が目に砂を振り掛けた」という言い回しになるわけ。
- (104) 誘屋そしりや姉氏 *Freund Neidhart*. 「沈黙の恋」訳注参照。
- (105) ニュルンベルク *Nürnberg*. 現在バイエルン州。中部フランケンフランクの由緒ある都市。一〇五〇年には既にその名が文書に登場している。一〇六二年市場開設権を取得、一二一九年王都として承認され、以来しばしばドイツ王の滞在地となる。ニュルンベルクは北から南、東から西への交易路の交点に位置し、一二五六年ライン都市同盟の一員となり、一五〇〇年頃には二万以上の住民を数え、金属加工、交易（一三五〇年以降は特にイタリアとの）などの諸産業は早くから栄え、いくつもの名家がこれに従事した。この神聖ローマ帝国直属都市の天敵であるブルクブルク伯（城市の司令長官。東部ドイツやニュルンベルクでは裁判権さえ持っていた）からニュルンベルクは一四二七年市内および市近郊の幾つもの占有権を買収、その都市としての独立性を拡大した。また、この強力な都市は城ブルク伯と一三八七―九一年、一四四九―一五一年、一五二一―五三年と干戈かんかを交えている。この物語の背景の年、第一次の戦いが済んで三年ほど経過したわけ。
- (106) ドんがらがタつちやんの宵 *結*婚式の前の晩、花嫁の家の外で陶器の壺や皿などを碎いて大きな音を立て、邪悪な魔物を祓い、花嫁の幸福を招く風習を指す。
- (107) 市の立つ広場 *ドイツ語圏の都市の中心部。市参事会の開かれる市庁舎や、商工業者の同業組合会館なども普通ここに面しているか、あるいはその近傍にあつた。つまり目抜き場所である。*
- (108) 豊饒フレイムの角 *Füllhorn*. 「たつぷり角」はローマ神話の幸運の女神をも指すが、ここでは豊饒フルクサの角（あらゆる宝が流れ出す山羊の角）であろう。「沈黙の恋」訳注参照。
- (109) 聖ヴァアルブルギスの祝日の前夜 諸病の守護聖人とされるイングラント生まれの聖ヴァアルブルガ *Walpurga*、ヴァアルブルガ *Walburga*（ラテン語ヴァアルブルギス）の祝日は五月一日（と二月二十五日）。この前夜、すなわち四月三十日から五月一日に掛けての夜、ハルツ山地の最高峰ブロッケン山に魔女たちが集まってらんちき騒ぎを繰り広げる、との民間伝承は有名、いわゆる「ヴァアルブルギスの夜」。これは元来ケルト人が夜を籠めて山上に登り、夜明けとともに太陽神崇拜の儀式を行ったことから発しているようだ。
- (110) 魔女 *Druide*. 夢魔、妖魔、女の魔法使いをも指す。中世高地ドイツ語のトゥルーテ *trute*（幽霊）から。「ローラントの従士たち」訳注「ドリュイド」の項をも参照。
- (111) フィヒテルベルク *Fichtelberg*. ザクセンの最高峰。「屈背のウルリヒ」訳注参照。
- (112) アンドレアスベルクが見つかり しかし、この固有名詞はすでに訳注で記したように鉱山町の名なのだから、ペーター親方がハルツ山地の住

- 人に訊けば、すぐに分かったはず。ムゼーウスは、人にあまり知られていない山の名だ、と勘違いをしているようである。
- (113) 詩神ヒポクレネの泉 ヒポクレネは九柱の芸術の女神ムーサイの住まいとされるポイオティアのヘリコン連山にある泉。有翼天馬ペガソスが蹄で岩を打った痕から湧き出し、これを汲む者は詩的靈感を授かった、とギリシア神話にある。
- (114) リヨンの両替商フィンガラン Wechsler Fingerlin zu Lyon. リヨンはローマ時代に既にガリアのルグドゥウムとして知られていた古い歴史を持つフランスの都市。十八世紀当時においても商工業（今日では特に絹織物工業で有名）が盛んで、住民数もフランス有数だった。ここの両替商（金融業者）なら巨富を蓄えていたことだろう。アントアヌ・テヴェネ Anton Thevenet（ムゼーウスは名をドイツ語流に綴っている）は有名な強盗団ないし窃盗団の首領であろう。ともに未詳。この事件はこの頃あらゆる新聞にかなり長いこと大段的に書かれた、とムゼーウスのヴァイマルにおける友人クリストフ・ヴィーラントも言及している。
- (115) エルリヒ Eilrich. ザクセンの町。
- (116) アマラントとナントヒェン Amaranth und Nantchen. 当時非常に人気があった『二人の恋人たちの唄』*Lieder zweier Liebenden*（一七七七年）の相思相愛の男女の名前。これはレオポルト・フリードリヒ・ギュンター・フォン・ゲッキンク（一七四八—一八二八）と後に彼の妻となつたフェルディナンド・フォスベルによって書かれた。ゲッキンクは一七七〇年から一七八六年までエルリヒの官房カントラクトレック長だった。
- (117) おしゃべり、ばか斬、性格点描 *Schnaken, Schurren, Charakterzüge*. 一七八三年ベルリンにおいて二巻本で出版された、J・J・A・フオン・ハーゲンの断と物語風素描集の題名。
- (118) 慰めは思いも掛けないところから来るのがよくある これに相応する聖歌は、カトリック教会のそれにも、福音派のそれにも見当たらない。
- (119) 愁い顔の騎士 セルヴァンテス『ドン・キホーテ』第一部第十八章で羊の群に突貫して羊を何頭も殺したので、怒った羊飼いたちが投げた石に何本も歯を叩き出されたドン・キホーテの顔を、第十九章でつらつら眺めた従者のサンチョは、騎士道小説のお約束通り、主人に「愁い顔の騎士」という添え名を付ける。
- (120) エッティングゲン Öttingen. ムゼーウスの時代、フランケンと同じくバイエルン王国に属してはいた（現在も同じバイエルン州）が、シユヴァーベンの町。フランケンとしたのはムゼーウスの誤まり。その名は九一七年文書に登場。一一一八年築城される。一二〇〇年頃都市となる。エッティングゲン伯爵のさまざまな家系に属し、一八〇六年バイエルン王国領となる。
- (121) 四旬節 復活祭前の六週間半、すなわち、灰の水曜日から復活祭の前日までの、日曜日を除く四十日の精進期間。肉食（乳製品、卵、魚介類、ある種の水鳥は許される）は止め、努めて根菜類などの素食（粗食）をする。「四旬節風粗食」は「屈背のウルリヒ」に出る。なお、中世にはまだ他にも二期、それぞれ数十日の精進期間があったが、近世人であり、新教徒であるムゼーウスの念頭には無かつたらうから、それらの注釈は割愛する。

(122) ハルツの貨幣 十六世紀から十八世紀にかけてのブラウンシュヴァイクのターラー銀貨、いわゆるヴァイルデマンスタターラーや、グルデン（三分の二ターラー）銀貨のヴァイルデマンズグルデンのこと。いずれも良質でハルツの銀で製造された。ここでムゼーウスの念頭にあるのはヴァイルデマンズグルデンの方。「森男」とは、ドイツおよびスラヴの民間信仰によれば、分厚い毛皮か苔の衣を纏った半人半獣の森の精である。

(123) ブラウンシュヴァイク Braunschweig 北西ドイツの公国。名族ヴェルフエン家の世襲領の一つだった。ハインリヒ獅子公（「愛の信実」、「メレクザール」 訳注参照）がこれを保持。のち神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ二世が領有。ムゼーウスがこの物語を出版した当時のブラウンシュヴァイク公はカール・ヴィルヘルム・フェルディナント（在位一七八〇—一八〇六）。同名の首都是ハルツ山地を背後に控え、オーカー河の兩岸に広がっている。

(124) 先に刊行した第四部の一〇〇ページで犯した罪過「沈黙の恋」に次のようなおちやらかしがある。ムゼーウスはこれを厳肅に撤回・訂正しているわけ。

……そこでフランツは、（中略）こりやもしかすると幽霊は先刻自分にしたのと同じ奉仕をしてもらいたがっているのじゃないかな、と思いついた。これは図星だったのであって、その点、領地管理官が罪人を審問するように、その名も高いブラウンシュヴァイクの亡霊を取り調べたのに、こやつがその濫りな出現によってそもそも何を主張したいのか白状させるに至らなかった、今は故人の見霊者エーダーより幸運だった。

(125) これに関する著者の詳細な声明「ゴータ教養新聞」（一七八六年八月五日）には次のようなムゼーウスの文章が見出される。（一）内は訳者の補遺である。

読者諸賢へ

ドイツ人の民話の著者は、第四部一〇〇ページにおいて、名声高き学者にしてブラウンシュヴァイク公国財政局参議官であられた故エーダー教授のお名前を、事情に通じていない向き——この中には当時著者自身も伍していたわけですが——の目には、この功績に満ちた人物の思い出にややもすると芳しからざる翳を披げかねない局面で引用するに至りました。この件はブラウンシュヴァイクの、それも文書で証明されていない幾つかの主張に基づく、幽霊についての多年に亘るある伝承を仄めかしたものです。著者は迂闊にも見霊者（霊を見る人、降神術者、巫術者）という侮辱的な表現をも用い、これをかの精神的な人物の属性といたすに及びました。死者たちには弁明が叶いません。しかしながら、死者たちがその奥津城にまで携えて行ったもつともな敬意を、公正ならざる遣り方で侵害されることのないよう、慮るのは、

後に残された友人たちの責務であります。それゆえ著者は、なるほど意図したわけではないにせよ、だからといって一向不快の念を減ずるわけではないかかたる不当行為に当然ながら感情を害された、故人のほらからでいらつしやるデンマーク王国参事会員、ホルシユタイン<sup>II</sup> オルデンブルク公国（一七七三年ロシア帝国のパーヴェル大公（一七九六年まで女帝としてロシアに君臨した啓蒙君主エカチエリーナ二世の不肖の息子。母の没後四年半皇帝パーヴェル一世として常軌を逸した行動に終始し、暗殺される）はホルシユタイン公国に有するその權益を、オルデンブルク伯爵領およびデンホルスト伯爵領と引き換えにデンマーク王室に譲渡したので、これが書かれた時期ホルシユタイン公国はデンマーク王国と運命を分かっている。デンマークに併合されたのは一八〇六年。一八一五年にはドイツ同盟（加入）<sup>ラウバント</sup>知事ケオルク・クリステイアン・エーダー殿から、この品位ある人物の尊敬すべき資質に相応しいなさりかたではあります、今般要請がなされ、著者の誤った見解およびこれに起因する不適切な表現が事実無根であることに關してまずご教示があったのち、それ自体正しくないと同時に故人の賞賛すべき思い出を毀損するこの箇所を公に取り消し、生じた事態をできうる限り是正するよう求められたことを、毛頭意外とは存じません。著者は、かくのごときしかるべきご要請にお応えせざるをえません。また、軽率に犯したごうした過誤を否定するつもりもなく、否定することもできません。それどころか著者は兄弟愛のかくも誉れ高き例証のお蔭で、このように率直な告白を行い、犯した罪過を少なくともいくらかは償い、そうすることによって同時に、かように著者に対し誹謗の取り消しを要請された尊敬すべき人物への微塵の疑いもない敬意を表明する機会を得た次第です。従って著者は「ドイツ人の」民話の読者諸賢に、故人エーダー殿——死者への供物として進んで行われたこの撤回がなにとぞその幽魂を鎮めてくれますように——に關する上述の箇所を許されぬもの、全く言明されなかったもの、と看做されんことを懇請いたします。読者諸賢へのこうしたお願いを「ドイツ人の」民話の次の部（最終巻である第五部）で繰り返す（ムゼーウスは前掲の原注（3）でこれを実行している）ことも否かではありません。

著者謹識

読みにくい和訳で申し訳ありません。訳者のドイツ語和訳能力にも大いに責任が有りました。原文にできるだけ忠実に、を心掛けましたら、こんなでいたらくになりました。なにせ随分と持つて回った文章です。ムゼーウスの意図も案外そんな所にあつたのかも。

(126) シュニプス夫人 Frau Schuips. 物語詩人として傑出した（代表作は『レノール』）ゴットフリート・アウグスト・ビュルガー（一七四七—一七九四）が一七七七年英国のあるお手本に倣って書いたが、友人たちの宗教上の懸念のため、一七八二年の「ゲッティンゲン詩神年鑑」で漸く活字になった物語詩で、天国入りを拒まれそうになったシュニプス夫人は、これに代えて、聖書のありとあらゆる始祖たちを、罪深くくだらない暮らしをした、として金切り声を挙げて誹謗・中傷してゐる。

(127) かの名高き宮廷の若き画家『宮廷の若き画家』Der junge Maler am Hofe というのはフランツ・クラッターのある戯曲の題名。クラッターは

一八三〇年、当時オーストリア領だったレンベルク（現ポーランドのルヴウ）の舞台監督として死亡。

(127) アウド *Oude Oudh* なら北インドの一地方（現ウッタール・プラデシユ州に属する）。

(129) ヘイスティングズ氏が……という彼に対する有名な告訴 一七八五年に帰国した東インド会社の初代ベンガル総督・初代インド総督だったウオレン・ヘイスティングズは、帰国後在任中圧政があった、として弾劾裁判に掛けられた（裁判は一七八七年から七年以上に及んだが、結局無罪）が、その主要訴因の一つに、彼が三人のインドの王女たちを裸体にして奴隷市場で競売に掛けた、とするものがあった。「屈背のウルリヒ」訳注をも参照のこと。

(130) 文学上の黒人奴隷貿易請負によって、精神の所産だ、などと言いつけてもらうのが関の山 ムゼーウスが何を言いたいのか、訳者にはさっぱり分かりません。どなたかご高教を。

## 解題

ブロッケン山に埋蔵されている宝物の非常に詳細な描写の素材としてムゼーウスは原注で、昔の手稿を用いた、と指摘している。他の物語とは異なり、ここでは例外的に文学的フィクションではなく、実際の指示が事細かく引用されているらしい。これはDSでも扱われている「シラリング・ウルツェル開錠根」（DS九番）のモティーフについても同様にあてはまる。ハルツの山の精の形容についてもしかり。結局この物語は中部ドイツと北部ドイツの伝説と民話を色色混ぜ合わせたものである。ただし、これがもとだ、と話を特定することはできない。

絵姿を見てそのモデルに恋い焦がれ、その女性を探し出し、これと幸せな結婚をする男性のモティーフは、ムゼーウスの創作かどうか。

ちなみに、『千一夜物語』の「イブラヒムとヤミラー」（大場正史訳バートン版『千一夜物語』〈角川文庫、ちくま文庫〉第九百五十三夜〜第九百五十九夜）では、エジプトの大臣の息子で十五歳の美少年イブラヒムは、絶世の美女の似姿を載せた本を見てこの女性に一目惚れ。それを描いた画家のいるバクダードまで長途の旅をし、更に画家に

教えられてバツソラー（＝バスラ）に行き、総督の息女ヤミラーに巡り会う。二人は相思相愛の仲になり、なお紆余曲折はあるが、結局幸せな結婚をする。また、KHM六番「忠臣ヨハネス」の若い王は黄金の屋根の国の王女の立像を見てぞっこん惚れ込み、忠臣ヨハネスの巧妙な策略で彼女と結婚する。同じくKHM一三五番「白い花嫁と黒い花嫁」では、女主人公の兄がいとしい妹の絵を描いて自室に掛けておく。彼はある王に御者として仕えている。美しい王妃が亡くなったばかりの王がこの絵を取り寄せ、絵姿が故人にそっくりで、更に美しいので、結婚しようとする。

終わりに訳者から一言。ペーター親方の科白のうち一箇所だけ出て来るフランケンのお国訛りをどう日本語に移そうかと思案投げ首。もとより標準語ではおもしろくない。そこでヨーロッパ比較文化学科の同僚福間具子専任講師にお教えを請うた。随分と考えて下さった結果をとくにご賞玩を。福間さん、どうもありがとうございました。